

令和元年度 文部科学省委託

「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」

幼児教育と小学校教育の
円滑な接続を図る
教育過程や指導方法の工夫の
在り方についての研究

令和2年3月 国立大学法人 宮城教育大学
協力：全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

本報告書は、文部科学省の「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」の委託費による委託業務として国立大学法人宮城教育大学が実施した令和元年度幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究の成果をとりまとめたものです。
したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。

はじめに

私たち宮城教育大学附属幼稚園は、今年度、文部科学省初等中等教育局の「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」の委託を受けることとなりました。調査研究課題は「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図る教育課程や指導方法の工夫の在り方についての研究」です。

平成30年4月から全面実施されている幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力（「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」）が明確化されています。各幼稚園においては幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成されることが求められます。

また、幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、この具体的な姿を踏まえ教育課程を編成することや、幼児一人ひとりの発達に応じた指導を行う際に考慮することが求められています。

そして、幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、幼稚園教育と小学校教育の連携を図ることの必要性が示されています。

宮城教育大学附属4校園は『「かかわり合う力」をはぐくむ』というテーマで、平成16年度から連携研究に取り組んできました。附属幼稚園ではこれを受けて、現在「子どもが夢中になって遊ぶ環境とその援助～心の育ちと言葉の育ち～」（2年次）という主題及び副題を設定し、子供同士の関わり合い、コミュニケーションを通じた言葉の発達と心及び思考力の発達を明らかにすることを目的として研究、実践に取り組んでいます。この中で附属小学校低学年児童との交流と教員との話し合いを計画的に行っていきたいと考えています。

これらを踏まえ、本調査研究では幼稚園で育まれる資質・能力をどのようにして小学校と共有することがより円滑な接続につながるのかを、事例を調査、整理することで明らかにし、小学校との円滑な接続に留意した教育課程や指導方法の工夫を探っていくこととしました。

本調査研究を進め、報告書を作成する過程において、全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会の皆さまには貴重な実践事例の提供をいただきました。また、文部科学省初等中等教育局湯川秀樹視学官、本学の佐藤哲也教授、飯島典子准教授、そして兵庫教育大学鈴木正敏准教授、上智大学奈須正裕教授、國學院大學神長美津子教授の各氏には、専門的な立場から講話や助言をいただき、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた幼稚園教育、小学校教育との接続を図る教育課程や指導方法の在り方、本調査研究の方向性について貴重なご教示と示唆を得ることができました。さらに、東北・北海道地区国立大学附属学校連盟幼稚園部会の皆様には、ワーキング委員会委員として本調査研究の遂行に大きなご尽力をいただきました。心より感謝と御礼を申し上げます。

報告書で示されている内容が、本研究の成果として、幼稚園教育の現場で日々努力されている先生方、そして子供たちの幸せと資質・能力を育むことに少しでも寄与することを願っております。

宮城教育大学附属幼稚園
園長 木下 英俊

目 次

I	研究の目的と方法	1
1	研究の背景	1
2	研究の目的と期待される効果	2
3	研究成果の普及・啓発	2
4	研究の方法	2
II	研究の内容	3
1	幼小接続の取組状況についての収集	3
(1)	情報収集の方法	3
(2)	幼小接続の取組状況報告の収集結果	4
2	幼小接続の取組状況報告についての整理・検討	17
(1)	幼小接続の取組状況についての分析方法	17
(2)	幼小接続の取組の特徴の分析	17
①	視点1「小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために」	18
②	視点2「小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために」	25
③	視点3「小学校との共有を図るために」	33
(3)	協力園の幼小接続の取組状況報告	40
(4)	特色ある取組のグルーピングと整理	54
	連携から接続へのプロセスに見る考察	106
(5)	効果的な幼小接続についての考察	107
3	本園の幼小接続の実際	108
(1)	幼小接続の視点から見た教育課程の見直し・改善	108
①	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関わり	108
②	接続期カリキュラムの作成	108
(2)	保育記録の見直し・改善	109
(3)	附属小学校との共有	110
①	5歳児と2年生の交流活動	110
②	交流活動と授業づくり	110
③	接続期カリキュラムをもとにした話合い	111
(4)	本園の幼小接続の取組	113
III	研究の成果と課題	115
1	研究の成果	115
2	今後の課題と展望	117

IV 資料 ※付属CD-ROMに収録

1 幼小接続の取組の報告

全国国立大学附属幼稚園49園の事例

2 幼小接続トピック資料

全国国立大学附属幼稚園49園の幼小接続に関する取組で、該当園のトピックとなり、自園の現状に合わせて活用できる事例

3 「幼稚園教育と小学校教育の違い」調査結果

全国国立大学附属幼稚園49園の幼小接続に関する実態

4 勉強会記録

(1)「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続について」 ※令和元年度幼稚園教育課程宮城県研究協議会講演に於いて

文部科学省初等中等教育局

視学官 湯川 秀樹 氏

(併任 初等中等教育局幼児教育課 教科調査官)

(2)「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続とは

～幼児の発達をどう理解するのか～」

宮城教育大学教員キャリア研究機構幼児教育(保幼小接続)研究部門

教授 佐藤 哲也 氏

准教授 飯島 典子 氏

(3)「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続とは」

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 専門職学位課程

小学校教員養成特別コース 准教授

国立教育政策研究所 幼児教育センター フェロー

鈴木 正敏 氏

(4)「遊びの中でつむぐ言葉と心

～子供の未来につながる力を育てる～」

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 専門職学位課程

小学校教員養成特別コース 准教授

国立教育政策研究所 幼児教育センター フェロー

鈴木 正敏 氏

(5)「幼小の円滑な接続とこれからの幼稚園教育」

上智大学 総合人間科学部 教育学科

教授 奈須 正裕 氏

5 訪問調査記録

(1) お茶の水女子大学附属幼稚園

(2) 神戸大学附属幼稚園

(3) 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園

(4) 上越教育大学附属幼稚園

I 研究の目的と方法

1 研究の背景

本園は、平成16年度より取り組んでいる、宮城教育大学附属校園連携研究テーマ『かかわり合う力』をはぐくむ』を受けて、平成27年度から29年度にかけて、研究主題を「子どもが夢中になって遊ぶ環境とその援助」、副題を「体を動かして遊ぶ」として、子供の遊びの充実と保育の質の向上を目指す実践研究を行ってきた。

昨年度からは、「心の育ちと言葉の育ち」を副題にして、子供同士の関わり合いとそれに伴う動きや表情（非言語的コミュニケーション）、言葉でのやり取り（言語的コミュニケーション）を観察、分析し、子供の言葉の発達と心の育ち及び思考力の育ちとの関連性を明らかにすることで、子供のよりよい発達を促し保育の質を向上させるために研究を推進してきた。具体的には、「幼児一人一人の実態と変容や日々の保育とドキュメンテーションの作成等の記録の累積と分析」、「保育記録映像とTEM図を活用した保育カンファレンスの実施」、「異学年交流や附属小学校低学年児童との交流と教員との話し合いを計画的に行う」の3点を行った。今年度は上記主題・副題で行う研究の2年目となるが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「附属小学校との交流の在り方」から5歳児年長児を中心に教育課程の見直しを図り、教育課程と実践した保育や幼児の実態と変容の記録を活用して、幼稚園での子供の学びの成果と小学校の学習へのつながりを附属小学校と共有することで、小学校への円滑な接続を図ることを目指している。

平成30年4月から施行された幼稚園教育要領の第一章総則第3「教育課程の役割と編成等」では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた教育課程の編成をすること」とし、具体的な留意事項の一つとして、「(1) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。(2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。」とある。幼稚園における教育は、その後の義務教育の基礎を培うことはもとより、義務教育以降の教育の基礎、つまり生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである。具体的には、幼稚園教育では、環境を通して行う教育を基本としている。幼児は、それぞれの興味や関心に応じ、直接的・具体的な体験などを通じて幼児なりに学んでいくものであって、小学校以降の学習と異なり、教科書のような主たる教材を用いたり、教師があらかじめ立てた目的に沿って順序立てて言葉で教えられ学習したりするものではない。幼児が遊びを通じて、学ぶことの楽しさを知り、積極的に物事に関わろうとする気持ちを育む過程こそ、小学校以降の学習意欲へとつながり、さらには、物事に主体的に取り組み、自ら考え、様々な問題に積極的に対応し、解決していこうとする態度へとつながっていく。そのためにも、幼児期に多様な体験をし、様々なことに興味や関心を広げ、それらに自ら関わろうとする気持ちをもつことが大切なのである。こうした幼稚園教育の課題と方法を踏まえつつ、学校教育としての学びと育ちの連続性を促進するためにも、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続は極めて重要で一層の推進が求められている。そのため、幼稚園教育の成果をより豊かな小学校生活を送ることへとつなげていくことができるような、幼稚園等から小学校教育への接続に留意した教育課程や指導方法を工夫することが重要となる。幼小の円滑な接続については、これまでも多くの取組がなされてきたが、改めてその実態を調査し、効果的な取組の在り方について検討することにより、子供たちの生涯を見通したより良い成長と教育活動の質の向上へとつなげていきたい。

昨年度、鹿児島大学附属幼稚園が全国の国立大学附属幼稚園の協力を得て取り組んだ『社会に開かれた教育課程』を編成するカリキュラムマネジメントに関する研究』の成果も踏まえ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にしたカリキュラムマネジメントのポイントについて検討し、教育課程の編成や指導方法に生かしていきたい。

2 研究の目的と期待される効果

本調査研究では、幼稚園と小学校が、「幼稚園で育まれる資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し、幼児や園、地域の実態に即した幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るための具体的な方法の在り方を明らかにすることを目的とする。その際、本園の取組だけでなく、協力団体の全国国立大学附属連盟所属幼稚園から、小学校教育との接続について「(1) 教育課程の編成」「(2) 指導方法」「(3) 小学校との共有」の3点の工夫について、教育活動の実践的な事例を収集して整理し、成果報告書にまとめる。

また、本調査研究では、次に示す具体的な成果が期待される。

- (1) 協力園から幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るための取組事例を集め、整理することにより、全国の国立大学附属幼稚園における幼小接続の取組を明らかにすることができる。
- (2) 協力園の取組を分析することで、「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続」を図るための効果的且つ具体的な取組や重要なポイントを明らかにすることができる。
- (3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に、小学校教育への接続を見通した教育課程の編成と見直しや各年齢の子供の姿とこの時期にふさわしい指導について具体的な事例を明らかにする等の、教育活動の質の向上を図ることができる。

3 研究成果の普及・啓発

研究成果の普及・啓発のために、次の取組を実施する。

- (1) 研究成果を報告書としてまとめ、配付することで、幼稚園教育要領が示す幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図る教育課程や指導方法の在り方を全国の幼稚園に広める。
- (2) 研究成果を報告する他、その概要版を作成し、全国の国立大学附属幼稚園が各都道府県の国公立幼稚園・こども園協議会及び私立幼稚園協議会等関連団体に各種研修会等で報告・伝達することにより、全国の幼稚園等へ汎用できる事例として普及する。
- (3) 研究成果を本園ホームページに掲載することで、広く全国の幼稚園で活用できるようにする。
- (4) 宮城教育大学教員キャリア研究機構幼児教育（保幼小接続）研究部門所属教員の指導・助言及び協力を得ることで、本研究成果を教員養成教育の一助とし、宮城県内外の幼稚園等他関係団体に成果を還元する。

4 研究の方法

本調査研究においては、次の取組を実施する。

(1) 幼小接続の取組状況についての収集と整理、検討

園内で幼小接続の勉強会を実施し、幼小接続についての共通理解を図るとともに、全国国立大学附属幼稚園の幼小接続の取組状況をまとめ、その成果や今後の可能性と課題を確認し、改善の視点を整理する。

(2) 本園の幼小接続の取組

(1)で明らかになった改善の視点をを用いて、本園の幼小接続に関する取組を見直し、幼稚園教育要領で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に、附属小学校教員とともに教育課程を編成し、授業づくりを行う。また、入学した児童の実態から附属小学校教員とともに教育課程の実施状況を評価して改善を図る等、「小学校とともに」をキーワードに具体的且つ現実的な方法で幼小接続に取り組んでいく。

II 研究の内容

1 幼小接続の取組状況についての収集

幼稚園と小学校が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして子供の育ちを共有し、学びと育ちの連続性を促進できる円滑な接続についての有効的な実施方法を明らかにすることを目的として、各園の「幼小接続」の取組を収集・分析することとした。

本調査研究において、全国の国立大学附属幼稚園より取組状況等の報告を受け、研究協力を得ている。報告では、「A幼小接続の取組の報告」「B幼小接続に関する取組の実際」「C自園の幼小接続トピック資料」「D幼稚園教育と小学校教育の違い」についての調査の4点について提供を求めた。A、Bについては、それぞれの情報を整理・分析し、幼小接続における改善の視点を明らかにする。また、C、Dについては添付して、各所で参考または活用できるようにする。

(1) 情報収集の方法

令和元年11月に本園における「幼小接続」の取組の実際を例に示して、以下の2点について、全国の国立大学附属幼稚園48園に情報提供を依頼した。

A 幼小接続の取組の報告

本報告書では、「幼小接続に関する園の特徴」「小学校教育との接続に関わる取組と内容」「連携から接続へのプロセス」の3点についてまとめていただいた。また、「小学校教育との接続に関わる取組と内容」については、以下の3つの視点で記載をした。

- (1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために
- (2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために
- (3) 小学校との共有を図るために

B 幼小接続に関する取組の実際

「A幼小接続の取組の報告」の中で示した自園の具体的な取組内容のうち、自園の特色を表している取組の一つを選び、「取組の実際」「成果」「今後の展望」について詳しく報告書にまとめた。

C 自園のトピック資料

「B幼小接続の取組の実際」で紹介したものの中で、各園の特に特徴的かつトピック的な取組である。幼小接続への取組の具体的な参考となる資料として、提供する。

D 「幼稚園教育と小学校教育の違い」についての調査

以下の点について回答する。

- 1 小学校就学に向けて
 - (1) 自園の5歳児（抽出児10名、選択は任意）
 - (2) 担任している教員及び養護教諭
 - (3) 附属小学校該当教員
- 2 小学校教育への接続について
 - (1) 担任している教員及び養護教諭
 - (2) 小学校教員経験者
 - (3) 幼稚園教員の経験のみの者
- 3 小学校教育への接続について副園長（園長）として考えていること

(2) 幼小接続の取組状況報告の収集結果

国立大学附属幼稚園48園より幼小接続の取組について、情報提供された。本園分を含め、具体的な取組をまとめたものは、以下に示した通りである。なお、各園の「A幼小接続の取組の報告」及び「C自園のトピック資料」については、附属のCD-ROMにデータとして収録した。また、「B幼小接続の取組の実際」については、各園でも特に参考にできる取組であるため、報告書の欄に☆印で示し、参考資料として本報告書に掲載している。

項目にある「視点」は、以下の3点である。

- (1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために
- (2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために
- (3) 小学校との共有を図るために

A 幼小接続の取組の報告

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
1	北海道教育大学 附属旭川幼稚園	「12年教育」取組の柱の設定と方針の明確化	(1)		3
		幼小連携推進委員会の開催	(1)		
		幼小中連携会議	(1)		
		「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえたフォトカンファレンス	(2)	☆	
		マップ記録	(2)		
		教育課程の改善	(3)		
		連絡進学委員会	(3)		
2	北海道教育大学 附属函館幼稚園	教育課程の編成について	(1)		2~3
		幼児と児童の交流活動計画	(1)		
		コーディネーター会議	(1)		
		従来の保育の充実「活動のストーリー」	(2)		
		幼児の活動の意味づけ	(2)		
		活動の記録	(2)	☆	
		「めざす子供像」の共有	(3)		
		教育課程の再構築	(3)		
3	弘前大学教育学部 附属幼稚園	指導計画についてのPDCAサイクルの確立	(1)		2
		「小学校への学びのつながり」を意識した研修	(1)	☆	
		学習支援室「びあルーム」と特別支援コーディネーターの連携	(1)		
		小学校教育研究会への教員の参加	(2)		
		びあルーム（学習支援室）の個別指導	(2)		
		SEL（社会性と情動の学習）の導入	(2)		
		幼稚園公開研究会へ附属小学校教員の参加	(3)		
4	岩手大学教育学部 附属幼稚園	連絡入学園児の丁寧な情報交換	(3)		2~3
		週案、月指導計画を活用した評価	(1)		
		交流活動計画の作成・実施・改訂	(1)	☆	
		接続を意識した日々の取組	(2)		
		幼小交流における園内での話し合い	(2)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
4	岩手大学教育学部 附属幼稚園	保護者への発信	(2)		2～3
		個に応じた指導の共有	(2)		
		体験や学びの発信から活動内容の見直し	(3)		
		年度当初の話し合いのもち方	(3)		
		特別支援の取組み	(3)		
5	宮城教育大学附属幼稚園	交流活動計画の作成と実施, 改訂	(1)		2～3
		保育記録シートの作成と引継	(1)		
		学習支援室と附属校園コーディネーター連絡会	(1)		
		小学校就学に向けた取組	(2)		
		ドキュメンテーション	(2)		
		カンファレンスと保育記録	(2)	☆	
		特別支援委員会	(2)		
		単元共同開発	(3)		
		教育課程の見直し	(3)		
		学習支援室の取組	(3)		
		6	秋田大学教育文化学部 附属幼稚園	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた教育課程の編成	
5歳児から1年生までの就学前後プログラムの編成	(1)				
記録を基にした保育の計画・実施・改善	(2)				
就学へ向けた子供同士の交流	(2)			☆	
幼稚園教員・小学校教員の話し合い「幼小会」	(3)				
子供と子供の交流	(3)				
7	山形大学附属幼稚園	スタートカリキュラム実施と改訂	(1)		2～3
		教材及び活動履歴の共有	(1)		
		まつなみ学習指導員と附属校園特別支援コーディネーター連絡会	(1)		
		特別支援コーディネーターとともに行うソーシャルスキルトレーニング	(2)	☆	
		交流保育	(2)		
		保育記録を基にしたドキュメンテーション	(2)		
		子供たちの遊びから生み出すステージフェスティバル	(2)		
		子供たちが選ぶ遊びの設定	(2)		
		スタートカリキュラムについての共通理解	(3)		
		特別支援コーディネーターを中心とした情報交換・共有	(3)		
8	福島大学附属幼稚園	幼稚園教員による4月当初の1年生の授業等参観	(1)		2～3
		小学校低学年教員による幼稚園研究保育の参観と事後研究会	(1)		
		入学前連絡会における個々の把握	(1)		
		発達支援室「けやき」	(1)		
		生活について	(2)		
		保育内容について	(2)		
		附属小学校教員の幼稚園参観と四校園共同研修による事例検討会	(3)		
		スタートカリキュラムの見直しと改善	(3)	☆	
		スタートカリキュラムの実践	(3)		
		個別支援の情報提供	(3)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
9	茨城大学教育学部 附属幼稚園	週案研修会	(1)		2~3
		長期計画・教育課程の見直し	(1)		
		アッセンブリー	(2)		
		写真を中心としたクラスだより	(2)		
		掲示板の活用	(2)	☆	
		小学校との職員連絡会・小学生との交流会	(3)		
		保護者研修会での交流	(3)		
		四附属研究主任会	(3)		
10	宇都宮大学教育学部 附属幼稚園	教育課程の改訂	(1)		3
		5歳児の仲間と共に遊び込んでいく姿から小学校につながる学びの捉え	(1)	☆	
		心理学的側面からの幼児の変容の捉えと5歳児の生活の在り方の再確認	(1)		
		「もの」との出会いから生まれる学びを視点としたカリキュラムマネジメント	(1)		
		多様な協同する経験を意識した保育実践	(2)		
		プロジェクトでの保育・授業参観と検討	(2)		
		交流活動の内容、方法検討(小学校への見通しがもてる交流活動へ)	(2)		
		目指す学びの道筋の共有	(3)		
		幼児期後期から小学校入学前後のカリキュラムの共有	(3)		
		個々の幼児の引継ぎ	(3)		
11	群馬大学教育学部 附属幼稚園	学びの連続性に着目した教育課程の編成	(1)		2~3
		スタートカリキュラムの共有	(1)		
		子ども総合サポートセンターを活用した就学支援	(1)		
		振り返りの活動及び学級での話し合い「子ども会議」	(2)	☆	
		充実した交流にするための保育・授業参観	(2)		
		大学教員の研究成果の保育への活用	(2)		
		特別な配慮を必要とする幼児への指導	(2)		
		スタートカリキュラムの作成	(3)		
		子ども総合サポートセンターの取組	(3)		
12	埼玉大学教育学部 附属幼稚園	教育課程の見直し	(1)		2
		交流活動における小学校教員との連携	(1)	☆	
		幼小共通テーマの研究	(1)		
		幼児期にふさわしい経験の積み重ね	(2)		
		5歳児と小学校1年の双方保育・授業参観	(2)		
		小学校教員に対する「10の姿」アンケート	(3)		
		特別支援の視点の活用	(3)		
		次年度1年生担任による交流活動	(3)		
13	千葉大学教育学部 附属幼稚園	教育課程・めざす幼児像の見直し	(1)		2
		大学准教授と連携して行っている縦断的研究	(1)		
		「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた保育実践	(2)	☆	
		交流会の計画と振り返り	(2)		
		幼小相互が理解し合うための参観日の設定	(3)		
		個人記録の活用	(3)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
14	東京学芸大学附属幼稚園	幼児と児童の交流活動計画の作成と実施, 改訂	(1)		2
		幼児指導要録記述の工夫	(1)		
		特別支援教育コーディネーター会議	(1)		
		小学校就学に向けた取組	(2)		
		保育記録を活用した教員研修	(2)		
		校内委員会 (特別支援教育)	(2)		
		交流活動及び幼児指導要録の活用	(3)	☆	
		特別支援教育コーディネーター会議の活用	(3)		
15	お茶の水女子大学 附属幼稚園	「学びの概要」の作成	(1)		2~3
		5つのステージの考え方	(1)		
		4つの保育分野	(1)		
		接続期の設定	(1)		
		相互の教育を学び合う機会の保障	(2)	☆	
		ボトムアップの発想での連携	(2)	☆	
		生活・授業の中での自然な出会いと交流	(2)	☆	
		教育課程の見直し	(3)		
		スクールカウンセラーとの連携	(3)		
		附属学校連携研究会	(3)		
16	山梨大学教育学部 附属幼稚園	幼小の教員による交流活動の計画, 実践, 評価の実施	(1)		2~3
		幼稚園, 小学校, 大学の教員による共同研究の実施	(1)		
		幼児の「活動の履歴」から児童の「単元の内容」への連続性を考察	(1)		
		「幼小接続カリキュラム」の作成	(2)		
		幼児の興味や関心によるプロジェクト活動の実践	(2)	☆	
		期ごとの「経験の履歴」からの「子供の育ち」の把握	(2)		
		幼稚園・小学校・大学共同での接続カリキュラムの作成	(3)		
		子供一人一人の「育ちの履歴」の引継ぎ	(3)		
幼小中学校におけるスクールカウンセラーの継続的な関わり	(3)				
17	新潟大学教育学部 附属幼稚園	「幼小接続カリキュラム検討部会」の組織への位置づけ	(1)	☆	4
		幼小接続カリキュラムの作成	(1)	☆	
		幼小接続カリキュラムの実施と修正	(1)	☆	
		小学校との交流活動	(2)		
		「協同性」「言葉」「折り合い」を重視した環境構成と援助	(2)		
		幼小接続カリキュラム研修	(2)		
		授業参観・保育参観で互いの教育への理解を深める	(3)		
		幼小接続カリキュラム検討部会での接続カリキュラムの作成	(3)		
		接続カリキュラムを互いに参観し修正する	(3)		
18	富山大学人間発達科学部 附属幼稚園	教育課程の再編・実施・見直し	(1)		3~4
		幼児と児童の交流活動計画の作成と実施	(1)		
		保護者への接続期理解を推進する	(1)		
		接続カリキュラムの作成, 実施, 改善	(2)		
		5領域と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識した保育記録	(2)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
18	富山大学人間発達科学部 附属幼稚園	幼小接続推進会議（年間）	(3)		3～4
		授業参観と保育参観	(3)		
		小学校教員の保育体験と幼稚園教員の小学校授業体験	(3)	☆	
19	金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属幼稚園	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導計画の作成	(1)		2～3
		幼児と児童の交流活動計画の作成と実施及び改訂	(1)	☆	
		発達に応じたふさわしい保育	(2)		
		接続期プログラムについての協議, 改善	(3)		
		保育・授業の相互参観	(3)		
		幼児・児童の交流活動	(3)		
20	福井大学教育学部 附属幼稚園	教員の相互理解, 幼児教育と小学校教育のつながり	(1)		4
		幼小接続で育成すべき力を見通した全体的な計画	(1)		
		保育・授業の発展のための交流活動	(2)		
		環境や学びのつながりを意識した保育・授業の工夫	(2)	☆	
		長期的な見通しのある幼児教育と小学校教育の実践	(3)		
		自治体と連携した研修会・公開研究会等の活用	(3)		
21	信州大学教育学部 附属幼稚園	保育の参観と子供の遊びの意味を幼小中の職員で語り合う	(1)		3～4
		ラウンドテーブルで実践を語り合い省察する	(1)		
		カリキュラム開発ワーキングチームの取組	(1)		
		実践を語る会	(2)		
		5つのカンファレンスと保育記録	(2)	☆	
		特別支援コーディネーターの幼小への指導	(2)		
		単元共同開発	(3)		
		教育課程の見直し	(3)		
		特別支援コーディネーターの幼小への指導	(3)		
22	上越教育大学附属幼稚園	協同的な学びを重視した接続期の教育課程（接続プログラム）	(1)		4
		小学校からの学びの基盤となる力と「リテラシーの基盤」の内容	(1)		
		日常的な保育の振り返り	(2)		
		有益な指導方法に関するエピソードの集積	(2)		
		小学1年生の入門期を意識した交流活動	(3)	☆	
		保護者向け接続プログラム	(3)		
23	静岡大学教育学部 附属幼稚園	幼児期と児童期の円滑な接続の具体化	(1)		2
		保育実践の振り返りを行い, 多様な解釈がもてる話合いの機会の設定	(1)		
		ラウンドテーブル形式の研修	(1)		
		幼児期における資質・能力の三つの柱を意識した保育実践	(2)		
		「主体的・対話的で深い学び」の事例検討会	(2)	☆	
		なんでも相談会	(2)		
		幼小連絡会	(3)		
		保育・授業参観, 意見交換	(3)		
		大学と連携した生徒指導体制	(3)		
24	愛知教育大学附属幼稚園	年長児と小学校1年生の交流活動計画の作成と実施, 改訂	(1)		2
		年中児と年長児の交流活動計画の作成と実施, 改訂	(1)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
24	愛知教育大学附属幼稚園	育みたい資質・能力や10の姿を意識した週案	(2)		2
		小学校教育を意識した集団での活動	(2)		
		単元共同開発	(3)	☆	
		教育課程の見直し	(3)		
25	三重大学教育学部 附属幼稚園	幼児の姿を見取る視点の工夫	(1)	☆	2~3
		幼児の夢中になって遊ぶ姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で見る	(1)		
		日々の記録の取り方の工夫	(1)		
		教員の援助の方向性を明確にする	(2)		
		教員間での話合いと共有	(2)		
		小学校教員との話合い	(2)		
		一貫教育の取組み	(3)		
		保育参観・授業参観と協議会	(3)		
		教育課程の再編成とスタートカリキュラムの共同編成	(3)		
26	滋賀大学教育学部 附属幼稚園	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点としたエピソード記録	(1)		3
		小学校での姿を見通した教育課程の編成	(1)		
		グループで共通の目的に向かう活動	(2)	☆	
		ドキュメンテーションの作成	(2)		
		保育・授業の相互参観	(3)		
		協同してのカリキュラムの作成・検証	(3)		
		幼児・児童の交流活動	(3)		
		幼小連絡会議	(3)		
27	京都教育大学附属幼稚園	週案における「幼児期の終わりまでに育ってほしい」の明確化	(1)		2
		「グローバル人材育成プロジェクト」における年間指導計画	(1)		
		桃山地区学校園連携研究	(1)		
		交流活動の実施	(2)		
		小集団で活動する機会を取り入れる	(2)		
		小学校の授業時間を意識した生活を考慮する	(2)		
		附属桃山地区学校園連携教育	(3)	☆	
28	大阪教育大学附属幼稚園	小学校教育を見通した教育課程の作成	(1)		2~3
		平野5校園共同研究による「主体性を育むための評価指標」の作成	(1)		
		小学校との継続的な交流	(1)	☆	
		期ごとの幼児の姿をまとめる	(2)		
		小学校教員との情報交換を実施する	(2)		
		特別支援教育支援シートの作成	(2)		
		幼小連絡会の実施	(3)		
		特別支援教育連絡会の実施	(3)		
29	兵庫教育大学附属幼稚園	他校種の教育についての理解の促進	(1)	☆	2
		附属3校園の教員間の協議や連携交流活動の計画	(1)		
		接続を確かなものにする幼稚園教育	(2)		
		附属小学校の環境や教育を活用した幼稚園教育	(2)		
		体験登校	(2)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
29	兵庫教育大学附属幼稚園	附属3校園の連絡会	(3)		2
		幼児の情報提供・小学校との情報共有	(3)		
		幼児と児童の交流活動	(3)		
		幼小中が連携した交流活動	(3)		
30	神戸大学附属幼稚園	「事実」を基に「学び」でつなぐ、「資質・能力カリキュラム」の開発	(1)		4
		実践記録とドキュメンテーションなどを用いた根拠のあるカリキュラム・マネジメント	(1)		
		保育指導案の計画・実践・評価	(2)		
		遊びや生活のまとまりとしての計画・実践・評価	(2)		
		小学校との連携研究により創造し、充実させる「資質・能力カリキュラム」	(3)		
		幼小の指導案を一つにする交流実践	(3)	☆	
31	奈良教育大学附属幼稚園	教育課程の見直しと新たな研究テーマの設定	(1)		2
		研究内容の教育課程への落とし込み	(1)		
		年長児の生活の中に「協同性」が育まれるような保育を工夫する	(2)	☆	
		探求し思考する子供を育むための研究を進め、研修と実践を繰り返す	(2)		
		「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共通言語化	(3)		
		三附属合同実践交流会	(3)		
		研究を通しての職員同士の交流	(3)		
		交流活動の保育・指導案の作成	(3)		
32	奈良女子大学附属幼稚園	幼小一貫して育成したい資質・能力ベースのカリキュラム編成	(1)		4
		学びの伝承による自覚的な学びの促しと園生活との往還	(1)		
		「子どものスタート教育」として、「育ちの履歴」を作成	(1)		
		異年齢探究活動「なかよしひろば（幼5歳～小2年）の実施」	(2)		
		幼小一貫した評価の観点と評価と指導の一体化自己評価軸の生成・個と協働の学びの往還	(2)	☆	
		小学校文化の体験は5年生と5歳児で実施	(2)		
		多様な資質・能力の見取りと特別支援教育	(2)		
		共同研究	(3)		
33	鳥取大学附属幼稚園	指導計画の見直し	(1)		2
		「育てたい力の系統表」を活用した目標設定	(1)		
		ドキュメンテーションを活用した保育カンファレンスと評価	(2)		
		鳥取県との人事交流	(2)		
		附属小学校との合同研修会の開催	(3)	☆	
		小学校教員の研修の場とする	(3)		
		保幼小連絡会	(3)		
34	島根大学教育学部 附属幼稚園	幼小の円滑な接続につながる交流活動	(1)		3
		学びのキーワード分析シートの作成と引き継ぎ	(1)		
		学習生活支援研究センターの設置	(1)		
		子供の遊びを丁寧に見取り、工夫改善する保育実践	(2)		
		未来創造科に円滑に接続ができるように、探求的活動の素地となる遊びを通じた体験	(2)		
		未来創造科 WG	(2)	☆	
		子ども支援会議	(2)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
34	島根大学教育学部 附属幼稚園	単元共同開発	(3)		3
		教育課程の見直し	(3)		
		学習生活支援研究センターとの共同研究	(3)		
35	岡山大学教育学部 附属幼稚園	幼小共同活動の年間計画・実施・反省	(1)		3～4
		幼小共同活動の実施	(2)		
		「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で幼児の姿を読み解いた年長だよりの配布	(2)		
		小学校教員と共に「こどもカフェ」の実施～幼小接続カリキュラムの見直し	(2)	☆	
		1年生になったつもりプロジェクトの実施	(2)		
		教育課程の見直し	(2)		
		スクールカウンセラーによる継続的な支援	(2)		
36	広島大学附属幼稚園	教育課程の内容について	(1)		2
		幼児と児童の交流活動の計画と実施	(1)	☆	
		保育カンファレンスの実施	(2)		
		交流活動における指導法について	(2)		
		調査を通じて、小学校教員に園での取り組みを理解してもらう	(3)		
		幼児と児童との交流活動の前の教員と教員の打ち合わせ	(3)		
37	広島大学附属三原幼稚園	育成したい資質・能力の共通化と、それぞれの年齢・学年で育ってほしい姿の明確化	(1)		3～4
		幼小接続カリキュラムの開発	(1)	☆	
		保育カンファレンスやエピソードによる子供の育ちの評価と保育の見直し	(1)		
		幼稚園・小学校の保育・授業の相互観察とその後のカンファレンス等の実施	(2)		
		助言者を招聘した園内研究の実施	(2)		
		子供同士が対話する話合いの促進	(2)		
		単元共同開発	(3)		
38	山口大学教育学部 附属幼稚園	教育課程の再編成	(1)		2～3
		幼小中合同会議（月1回：幼小中全教員による）	(1)		
		教育課程に位置付けた計画的交流と必要性から創り出す交流	(1)	☆	
		5歳児の日々の保育の充実（振り返り・話合い活動、グループ活動）	(2)		
		保育後のミーティング（毎日）	(2)		
		事例検討（月1回程度）	(2)		
		教員同士の授業・保育参観（体験）	(2)		
		発達支援委員会（学期に1回）	(2)		
		一貫カリキュラムの編成	(3)		
		話合いの場の設定（幼小合同会議、保育・授業検討会、幼小連絡会）	(3)		
		学び合いの場の設定（子供同士の交流、教員同士の交流）	(3)		
		保護者との共有（合同参観日、学園だより）	(3)		
39	鳴門教育大学附属幼稚園	幼児期における科学的思考力の発達過程の把握	(1)		4
		現在の幼小接続カリキュラム（教育課程・指導計画）の分析と評価	(1)		
		接続期の設定	(1)		
		遊誘財によるカリキュラム生成	(2)		
		幼小接続カリキュラム実施並びに修正	(2)	☆	

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
39	鳴門教育大学附属幼稚園	月別指導計画の作成	(3)	☆	4
		「合同保育／授業」の計画と実施, 反省・評価	(3)	☆	
		人事交流	(3)		
40	香川大学教育学部 附属幼稚園	幼児と児童の交流計画の作成	(1)		4
		幼小合同研修会・合同連絡会の実施	(1)		
		「幼児期に育みたい資質・能力」の育成を重視した保育を展開し, 広める	(2)		
		幼稚園修了間近に年長児が小学校体験を行う	(2)	☆	
		幼稚園と小学校の教員が共同でスタートカリキュラムを作成する	(3)		
		幼小連携支援員(幼稚園に配置)と幼稚園教員が小学校スタート時に積極的に参観する	(3)		
		小学校教員(1年生の支援員)が幼稚園生活を体験する	(3)		
41	愛媛大学教育学部 附属幼稚園	幼小接続期カリキュラムの見直しと実践	(1)		3
		5歳児Ⅳ・Ⅴ期のカリキュラムについて	(1)		
		小学校入門期のカリキュラムについて	(1)		
		小学校就学に向けた援助の手立て	(2)		
		ドキュメンテーションの作成・発信	(2)		
		幼小の教員によるカンファレンスの実施	(2)		
		互惠性のある交流活動の計画と実施	(3)	☆	
		交流活動に向かう子供の意識の流れの重視	(3)		
		ワークシートの活用	(3)		
42	高知大学教育学部 附属幼稚園	教育課程及び月別指導計画の見直しと再編成	(1)		2
		週日案・記録の見直し, 月別指導計画の修正	(2)		
		ドキュメンテーション作成・研究協議の工夫	(2)		
		交流活動におけるねらいに基づいた実践・評価	(3)	☆	
		『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』の共有化	(3)		
43	福岡教育大学附属幼稚園	新1年生受け入れのための連絡会(2~3月)	(3)		1~2
		入学後の連絡会(6月)	(2)		
		「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を考慮に入れた指導要録の作成	(1)		
		幼児・児童の交流活動	(2)	☆	
		授業参観及び学校案内	(2)	☆	
		「1年生の保護者と年長保護者の座談会」(子育て座談会)の開催	(3)		
		給食に向けての取組	(3)		
44	佐賀大学教育学部 附属幼稚園	幼児と児童の交流活動計画の作成	(1)		2
		小学校との接続を意識した教育課程の見直し	(1)		
		小学校接続期を意識した5歳児の「遊び」の内容構成	(2)		
		教員間での保育参観・授業参観の実施	(2)		
		「カンファレンス」と「エピソード記述による事例研究」	(2)		
		「ポートフォリオ」(個人ドキュメンテーション)による情報共有	(3)	☆	
		幼小連絡会	(3)		
45	長崎大学教育学部 附属幼稚園	連携・交流計画の作成	(1)		2
		年度末の情報交換	(1)		
		教育学部支援ラボとの連携	(1)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
45	長崎大学教育学部 附属幼稚園	食育における連携	(1)	☆	2
		「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「自己肯定感の育成」を視点とした保育実践と記録	(2)		
		リーダーとしての自覚や集団としての意識が高まるような援助(5歳児)	(2)		
		指導計画を見直すPDCAサイクル	(2)		
		大学の専門教官を交えた年3回のカンファレンス	(2)		
		学部教官の保育への参加	(2)		
		教員同士の情報交換	(3)		
		子供同士の交流	(3)		
		幼稚園の「ミニ講座」に小学校教員が講師で参加	(3)		
46	熊本大学教育学部 附属幼稚園	評価指標の作成・活用	(1)		2
		PDCAサイクルを取り入れた週指導計画案	(1)		
		アプローチカリキュラムの作成	(2)		
		エピソード研究における評価指標の活用	(2)	☆	
		指導要録作成の工夫	(3)		
		卒園児の授業参観及び情報交換	(3)		
		四校合同研修会	(3)		
47	大分大学教育学部 附属幼稚園	「幼小連携ワーキンググループ」(平成30年度のみ)による見直し	(1)		2
		「幼小交流」と「幼小連絡進学委員会」の区別	(1)		
		「グローバル人材の育成」の素地を育む	(1)	☆	
		教員間の交流や授業・保育参観	(2)		
		幼児教育に造詣の深い教員の1年生への配置	(2)		
		相談支援ファイルの活用	(2)		
		幼小交流担当者会議	(3)		
		王子キャンパス会議	(3)		
		支援の必要な幼児についての情報	(3)		
48	宮崎大学教育学部 附属幼稚園	幼稚園の各年齢の指導計画の作成と実施, 改訂	(1)		2~3
		幼稚園の集団活動と交流活動の指導計画の作成と実施, 改訂	(1)		
		小学校就学に向けて集団活動や交流活動の実施	(2)		
		保育記録とカンファレンス	(2)		
		附属学校園特別支援委員会・カウンセリング委員会	(2)		
		共同研究	(3)		
		幼小連絡会	(3)		
		附属幼稚園に係る就学支援協議会	(3)	☆	
49	鹿児島大学教育学部 附属幼稚園	小学校交流, 小学校見学についての計画の作成と打ち合わせ	(1)		2
		個人用ドキュメンテーション作成	(1)		
		園行事における小学校施設の借用	(1)		
		小学校の学習とのつながりを研究テーマに設定	(1)		
		自主性を尊重し, 主体的に学ぶ子供の育成	(2)		
		掲示用ドキュメンテーションの作成	(2)		
		四附属特別支援教育コーディネーター部会	(2)		
		幼小中連携部会の実施	(3)		

	園名	取組と内容	視点	報告書	プロセス
49	鹿児島大学教育学部 附属幼稚園	小学校公開研究会と同時開催の公開保育の実施	(3)		2
		幼小連絡会の実施	(3)		
		個人用ドキュメンテーションの作成と引継ぎ	(3)	☆	
		九附属幼稚園部会と生活・総合部会の合同開催	(3)		

B 幼小接続に関する取組の実際

	園名	取組の実際	視点
1	北海道教育大学附属旭川幼稚園	フォトカンファレンス	(2)
2	北海道教育大学附属函館幼稚園	保育週案とミーティング	(2)
3	弘前大学教育学部附属幼稚園	小学校への学びのつながりを意識した 研修の積み上げ	(1)
4	岩手大学教育学部附属幼稚園	年長組と1年生との交流活動計画の 作成・実施・改訂	(1)
5	宮城教育大学附属幼稚園	保育記録とカンファレンス	(2)
6	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	就学に向けた子供同士の交流	(2)
7	山形大学附属幼稚園	特別支援コーディネーターと共に行う接続支援	(2)
8	福島大学附属幼稚園	スタートカリキュラムの見直しと改善	(3)
9	茨城大学教育学部附属幼稚園	週案研修会	(1)
10	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	小学校への見通しがもてる交流活動へ	(2)
11	群馬大学教育学部附属幼稚園	振り返りの活動及び学級での話し合い 「子ども会議」	(2)
12	埼玉大学教育学部附属幼稚園	交流活動における小学校教員との連携	(3)
13	千葉大学教育学部附属幼稚園	「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた 保育実践	(1)
14	東京学芸大学附属幼稚園	幼小交流活動における合同指導計画作成の活用	(3)
15	お茶の水女子大学附属幼稚園	機を捉え、環境面で配慮する交流	(2)
16	山梨大学教育学部附属幼稚園	「幼小接続カリキュラム」を踏まえた 指導方法の工夫	(2)
17	新潟大学教育学部附属幼稚園	幼小接続カリキュラムの作成と実践	(1)

	園名	取組の実際	視点
18	富山大学人間発達科学部 附属幼稚園	幼小連携交換保育（授業）	(3)
19	金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属幼稚園	互恵性で持続可能な幼小交流活動	(1)
20	福井大学教育学部附属幼稚園	「投げる」動作・遊びの多様性を 小学校の学びへとつなげる	(2)
21	信州大学教育学部附属幼稚園	幼小中共同の保育・授業実践を語る カンファレンス	(2)
22	上越教育大学附属幼稚園	交流活動「幼稚園で一緒に遊ぼう」 ～入学したばかりの1年生を幼稚園に招く～	(1)
23	静岡大学教育学部附属幼稚園	園内研修での話し合い（事例検討会）	(2)
24	愛知教育大学附属幼稚園	生活科の交流授業を通して小学校教員と学び合う （カンファレンスと実践記録）	(2)
25	三重大学教育学部附属幼稚園	幼児の姿を見取る視点の工夫	(2)
26	滋賀大学教育学部附属幼稚園	グループで共通の目的に向かう活動 （5歳児後半）	(2)
27	京都教育大学附属幼稚園	幼小で互いの授業・保育を見合う	(3)
28	大阪教育大学附属幼稚園	小学校との継続的な交流	(1)
29	兵庫教育大学附属幼稚園	異校種の教育についての理解の推進	(1)
30	神戸大学附属幼稚園	幼小の指導計画を一つにする交流実践	(3)
31	奈良教育大学附属幼稚園	協同性を育む「きぐみたいむ」 （年長5歳児合同保育）	(2)
32	奈良女子大学附属幼稚園	幼小教員が協働して教育実践における教員の意図を言語化する —幼小一貫した評価の観点を立ち上げる	(2)
33	鳥取大学附属幼稚園	遊びの具体的な姿を小学校と共有するために	(3)
34	島根大学教育学部附属幼稚園	未来創造科WG	(2)
35	岡山大学教育学部附属幼稚園	幼小接続期カリキュラムの見直し	(3)
36	広島大学附属幼稚園	小学校（子供・教員）との交流活動	(1)
37	広島大学附属三原幼稚園	幼小接続期カリキュラムの開発	(1)
38	山口大学教育学部附属幼稚園	教育課程に位置付けた計画的交流と必要感から 創り出す交流	(2)

	園名	取組の実際	視点
39	鳴門教育大学附属幼稚園	「科学的思考力や学びを接続し発展させる」 取組	(2)
40	香川大学教育学部附属幼稚園	幼小交流における『小学校体験』の改善	(3)
41	愛媛大学教育学部附属幼稚園	幼・小による交流活動	(3)
42	高知大学教育学部附属幼稚園	交流活動	(3)
43	福岡教育大学附属幼稚園	近隣の小学校（宗像市立赤間小学校）との交流	(2)
44	佐賀大学教育学部附属幼稚園	「ポートフォリオ」（個人ドキュメンテーション） による情報共有	(3)
45	長崎大学教育学部 附属幼稚園	幼小連携における食育指導の実際	(1)
46	熊本大学教育学部附属幼稚園	評価指標を活用した幼児の学びの捉え	(2)
47	大分大学教育学部附属幼稚園	「グローバル人材の育成」の素地を育む	(1)
48	宮崎大学教育学部附属幼稚園	附属幼稚園に係る就学支援協議会	(3)
49	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	個人用ドキュメンテーション	(3)

2 幼小接続の取組状況報告についての整理・検討

(1) 幼小接続の取組状況についての分析方法

収集した「A幼小接続の取組の報告」と「B幼小接続に関する取組の実際」の二つの報告書を基に、次の方法で分析・検討を行った。

方法1 「A幼小接続の取組の報告」の「小学校教育との接続に関わる取組と内容」について整理し以下の視点ごとに似ている取組や共通している取組をグルーピングする。また、それらの取組の特徴や効果、留意点などを明らかにする。

- (1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために
- (2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために
- (3) 小学校との共有を図るために

方法2 48園の「A幼小接続の取組の報告」で、各地区のブロックより1園を抽出して7園の幼小接続の取組について紹介する。

方法3 「B幼小接続に関する取組の実際」で似ている取組をグルーピングする。また、グルーピングしたものを連携・接続の視点から共通していることをカテゴリーとしてまとめ、幼小の連携・接続を推進する上で参考にできるように整理する。

方法4 「A幼小接続の取組の報告」の「連携から接続へのプロセス」について整理をし、それぞれの段階での大切なことや次のステップに推進するための留意点などを明らかにし、幼小の連携・接続を推進する上で参考にできるようにまとめる。

方法5 各園の「A幼小接続の取組の報告」「B幼小接続に関する取組の実際」を整理し、幼小接続を行う上で、参考になることをまとめる。

(2) 幼小接続の取組の特徴の分析

次の手順で、整理・分析を行った。表と図にしてまとめたものを示す。

- 手順1 各園の取組を一つ一つに切り分け、視点ごとに分ける。内容を確認しながら、似ている取組をグルーピングする。
- 手順2 それぞれの分けたグループの取組について、その成果や可能性、留意点をまとめる。
- 手順3 グルーピングした取組の共通点を見つけながら、さらに大きなカテゴリーに分け、ラベリングをする。
- 手順4 それぞれのカテゴリー、グループの関係性を捉え、図にまとめる。
- 手順5 視点ごとに大切な点をまとめる。

※ 丸数字は取組園数を表す。

① 視点1 「小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために」

教育課程

教育課程の作成	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程の作成⑤ 特色ある教育課程④
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 地域の幼稚園に紹介する。 教育課程の柱を作成する。 「資質・能力カリキュラム」での幼小の接続が可能である。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を考慮する。 幼児の実態に即しているかを評価・改善する。 資質能力の柱との関連を図る。 子供の成長・変容を主体的な生活という視点から段階的に分けて捉えた。 幼・小で共通の観点をもち、子供たちを見つめ育むことが重要である。 それぞれの資質・能力が育成されたかの評価を質的・量的両面で行う。

接続期カリキュラム	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 接続の具体化（自園のみ）④ 研究テーマとのつながり（自園のみ）① 援助の重点の見直し（自園のみ）① 幼小接続カリキュラムの作成（共同）⑦ スタートカリキュラムの共有（共同）① 幼小中一貫の取組（共同）①
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 就学前後プログラムの改善に生かしている。 幼稚園においても小学校での学びを具体的にイメージすることができる。 子供たちの育ちを見通した保育の実践ができる。 カリキュラムを修正する視点を獲得することができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 幼稚園教員が1年生の様子を参観する 年に2回情報交換を行う。 3年間の充実した保育が必須である。 カリキュラムの分析と評価をする。 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共通理解をする。 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考に、小学校低学年でも子供たちの姿を捉え直してもらおう。 これまでの実践に基づき現在の課題を踏まえた上で円滑な接続を意識した見直しをする。 小学校生活の話や修了生の小学校での姿を聞く。 幼稚園と小学校低学年教師の話合いをする。

教育課程の評価・見直し・改善

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育課程の見直し・改善⑦ ・ 研究との関わり② ・ P D C Aサイクルの確立② ・ 長期的な見通し① ・ 遊びの履歴を基に改善⑧ ・ 評価③
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚園教育が小学校教育へつながる基盤となることを再確認できる。 ・ 幼小接続の発信をすることができる。 ・ 小学校での姿につながる学びを再確認できる。 ・ 教育課程の見直しに生かす。 ・ 指導計画立案と教育課程の編成に生かすことができた。 ・ 幼児教育について発信する準備になる。 ・ 評価指標につながる姿を教育関係者に公開している。 ・ 目指す子供像を共通理解することで、小学校との接続に重要な役割を果たしている。 ・ 3歳児からの円滑な接続に取り組むことができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにする。 ・ 子供の見取りに偏りや特徴が見られないかを確認する。 ・ 計画を立て実践し、振り返って評価をし、指導計画の見直しを重ねる。 ・ 幼児の深い学びについて保育を振り返る。 ・ 幼児の姿や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえる。 ・ 幼児の遊びが小学校の教科における学習につながった実践事例を踏まえる。 ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて子供の姿を読み取り、接続に留意した評価の工夫をする。 ・ チームで評価を行う。 ・ 月末に指導計画の検討会を行い見直す。 ・ 特別支援学校と幼稚園から高等学校まで「主体性を育むための評価指標」を作成し、教育の接続を大切にしている。 ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた評価指標を作成する。

連携

特別支援

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援室の活用④ ・ 附属校園コーディネーター連絡会議⑤
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長期的な視点に立ち、継続的に支援する体制の整備。 ・ 保護者同意の基、個別の教育支援計画を作成する。 ・ 幼稚園と小学校が定期的にお互いの情報を共有する。 ・ 子供への一貫したサポートを行うことができる。 ・ 小学校入学に向けての不安や緊張を和らげる。 ・ 園内での早期支援につなぐとともに、就学後の継続支援にもつなげている。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人の教育的ニーズに応じた支援を行う。 ・ 具体的な支援についてのアドバイスをする。 ・ 定期的な情報交換を行っている。

保護者	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 保護者への接続期理解を推進する①
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 進級に当たっての家庭で必要なしつけについて保護者に話す。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 親の不安を取り除き，子供に安心感をもたせることができる。

教員間	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 異校種の教育についての理解の促進① 幼小中連絡会議② 組織・運営の整理① 各小学校との連絡会議（就学）② 異校種教員の研究保育の参観と事後研修会③ ラウンドテーブル形式の研修① 幼小接続カリキュラムの編成④ ワーキンググループの取組② 教材及び活動履歴の共有① 幼小共通テーマの研究① 指導要録②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 説明による周知と資料提示により円滑な接続に関する情報の共有を図っている 質の高い教育課程や指導・援助の在り方・評価を実践研究できる。 教材や遊びの履歴を基に生活科や図工で使用する備品等の見直しをする。 環境構成や保育の援助について話し合うことができる。 連携の方法を追求する意識の共通化が成された。 小学校教員が幼児の育ちと経験を知る上で有効活用できる。 就学先小学校教員と共通理解を図りやすい。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 異校種の教育についての理解の促進。 定期的な合同会議の開催。 一貫教育や接続について重点を置く。 年長担任が連絡会に参加する。 入学後の6月に連絡会を行う。 小学校教員に具体的に伝わるように配慮する。 教員間の相互理解を図る。 研究保育参観と事後研究会での伝え方の工夫 合同カンファレンスを行う 幼小の教員が協働して実践について語り合う。 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に示された文言を共通言語とする。 扱った教材について小学校と情報を共有する。 学びのキーワードで表し，分析シートにまとめ，指導要録に反映させる。 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにする。

大学	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 大学との連携⑤
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 相談と情報交換をしている。 附属幼稚園だけではなく附属小学校の教育課程編成の参考になる予定である。 教育課程の見直しをする。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 5歳児の行事前後の生活の在り方を再確認する。

交流活動	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 交流活動計画の作成・実施・改訂⑱ 園生活との往還② 小学校施設の借用① 校種間の連携交流活動②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 相互の教育課程への反映を図ることができる。 次の活動や次年度の計画に生かすことができる。 育つ姿や小学校の学習内容とのつながりを意識することができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 園児児童に負担のかからないような交流計画立案を作成する。 教師間の打合せの時間に負担がない形で正しく共通理解されるようにする。 幼小交流活動についての話合いの場を設定する。 5歳児の行事前後の生活の在り方を再確認する。

研修

園内研修	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 定期的な小学校の授業参観① 週案における10の姿の明確化③ 保育実践の記録を活用した振り返り④
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた教育課程を編成する。 保育実践の積み上げにつながる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて幼児の姿を読み取る。 P D C Aサイクルを取り入れた週指導計画を立てている。 小学校の授業参観や保育参観を組み入れる。

記録	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 保育記録の工夫② ドキュメンテーション②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 幼児の育ちと経験を伝えるツールとして活用できる。 教育課程の編成につながる。 根拠のあるカリキュラムマネジメントの実現につながる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 幼児の育ちや教員の援助の方向性に視点をもち、考察する。 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにする。 カリキュラム・マネジメントの日常的に意識化する。 園内研修に位置付けた継続的な取組をする。

【視点1 関係図】



【視点1 まとめ】

教育課程

小学校との接続に留意した教育課程の作成に関しては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして作成している取組や接続期を位置付け、接続期カリキュラムに着手している取組、さらには、作成した教育課程を様々な方法で評価・見直し・改善を図っている取組が多く見られた。そこで、これらの取組をまとめて「教育課程」の категорияに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

- カリキュラム作成にあたり「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校教員と共通理解するために、幼稚園教員が1年生の様子を参観したり、幼稚園教員と小学校低学年教員が話し合い、卒園児の小学校生活での姿を聞く機会を設ける等の情報交換をしたりしている。
- 評価、見直しに関しては、「幼児の遊びの履歴」を基に見直しを図っている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにしてPDCAサイクルで改善に努めている。また幼児の遊びが小学校の教科における学習につながった実践事例を踏まえている例も見られた。

② ①の見えた成果

- 幼稚園においても小学校での学びを具体的にイメージすることができ、また、目指す子供の共有化を図ることができる。最終的には、そうした共通理解の基で、幼稚園と小学校が共に接続期カリキュラムを作成することが重要であることがうかがえた。
- 幼稚園教育が小学校教育の基盤となることを再確認できた。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

教育課程の作成・見直しに際しては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、小学校教員といかに共有し、共に作成することができるかが重要である。

連携

小学校との接続を留意した教育課程の工夫に関しては、保護者や特別支援、大学、教員間の連携した取組が見られた。また、小学校教員と連携した取組が多く見られた。そこで、これらの取組をまとめて「連携」の categoriaに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

- 保護者や特別支援、大学、教員間の連携により、保護者へ接続期理解を推進する。
- 小学校との連携で、就学に向けての連絡会議のほか、小学校教員が研究保育を参観し、事後研修会に参加したり、合同カンファレンスを行ったりする例が挙げられた。
- 交流活動については、計画を小学校教員と共に作成し、実施する。交流活動の後は、相互の教育課程への反映を図ったり、次年度の計画に生かしたりしている。

② ①の見えた成果

- 保護者へ接続期理解を推進することで保護者の不安を取り除き、子供にも安心感をもたせるようにすることができる。
- 質の高い教育課程や指導・援助の在り方・評価を実践研究できる。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

各所との連携を通して、保護者の不安を取り除き子供に安心感をもたせるようにすることができるのと同時に幼小の交流活動を教育課程に位置付け、しっかりと行うことが重要である。

研修

小学校との接続に留意した教育課程を作成する上で、園内研究を活用して、週案や保育実践の記録を活用した振り返りが多く挙げられた。そこで、これらの取組を「研修」のカテゴリーに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて幼児の姿を読み取ったり、PDCAサイクルを取り入れた週指導計画を立てたりして教育課程を作成している。
- 保育記録やドキュメンテーションを幼児の育ちと経験を伝えるツールとして活用し、教育課程を編成している園も見られた。

② ①の見えた成果

- 保育記録を累積することで、深い幼児理解や質の高い保育実践につながる。
- 根拠のあるカリキュラム・マネジメントにつながる。
- 保育記録やドキュメンテーションを活用することで、教員間で幼児についての理解を共有できるとともに、小学校教員に幼児の様子を具体的に伝えることができる。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

教育課程の作成・見直しに際しては、記録の積み上げを基に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにすることで、職員で幼児の姿を共有し、教育課程に反映させることの重要性がうかがえた。

視点2 「小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために」

教育課程

教育課程の作成	
取組	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラムの作成・実施・改善（自園のみ）⑤ 指導計画の修正（PDCAサイクル）（自園のみ）② 接続カリキュラムの作成，実施，改善（合同）② 接続カリキュラム研修（合同）②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 子供の発達や学びの連続性を保障するための方策が得られる。 幼小の子供の育ちへの理解が深まる。 互いのカリキュラムへの共通理解が深まる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 科学的思考力を分析・検討し，児童期の生活科を貫きさらに，理科につながる指導内容や方法を開発する。 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながり。 入園から卒園までどのような力を育てていくべきかについて園内で協議する。 PDCAサイクルの確立。 次年度への改善を図る。 小学校へ出向き，研修会を行う。 カリキュラムについて外部（校内外の教諭，教育関係者）から意見をもらう。

記録・評価	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 保育記録⑥ ドキュメンテーション⑦ 評価⑥
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 個に応じた配慮，指導，支援。 保育のねらいや援助の方向性の検討。 遊びの見通し。 活動の意義や成長について理解を図る。 保育への理解。 年少から年長への育ちの理解。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 日案，週案，指導案形式の改訂。 どのような育ちが見られているか，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に偏ることなく見られているか等の評価。 協同的な活動を積み上げる。 明日への思いをもったり，満足感を感じたりできる。 生きる力の基礎，小学校以降の教育における基盤となることを提示。 成果だけでなく過程を伝え，子供の育ちを理解してもらえようとする。 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながりを意識する。 具体的な場面で資質・能力を発揮・伸長した子供の姿を予想して評価の観点を設ける。 子供の育ちにとって必要と考える遊びや生活を一つのまとまりとして計画する。 発達区分を意識して整理した幼児の姿と援助や環境構成について検討する。 自己評価軸を形成することで，自律的な学びにつなげる。

保護者	
取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ お便り，掲示板の活用④ ・ 語る会②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子供の育ちや幼小接続への理解を図る。 ・ 教員自身が保育を見つめる機会になる。 ・ 進学への不安を解消できる。 ・ 子供の発達や学びの連続性を保障するための方策を得られる。 ・ 幼小の子供の育ちへの理解が深まる。 ・ 互いのカリキュラムへの共通理解が深まる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ お便りを小学校教員へ配付。 ・ 子供の育ちや子供の発達の方向性への理解を図る。 ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をツールとして，子供の姿と教師の関わりについて伝える。 ・ 大学教員による講話。 ・ 卒園児保護者と年長児保護者の情報交換。

特別支援	
取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児への支援② ・ 教員への支援② ・ 個別支援ファイルの活用② ・ 特別支援会議⑦
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就学に向けた相談や，小学校適応のための情報共有を行う。 ・ 進学時の引継ぎ。 ・ 幼児や保護者への適切な支援を行う。 ・ 幼小一貫した資質・能力を育成するために，特別支援教育の視点から子供の育ちを見取る。 ・ 多様な子供理解の機会を作る。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援員によるチームサポート体制作り。 ・ 学習支援室長による個別指導を行い，自己肯定感を高める工夫や，小学校へのスムーズな適応のための継続支援を実施。 ・ 特別支援コーディネーターによる指導。 ・ 学部特別支援教育教員や特別支援学校教員の参観。 ・ 援助や支援の情報を共有する体制作り。 ・ 保護者から小学校への引継ぎ時に活用。 ・ 附属学校園で，同じ支援連携シートを活用。 ・ 小中学校の教員との情報交換。 ・ 園児の行動観察や，今後の支援について相談を行う。 ・ 幼児の実態や保護者との連携について検討する。 ・ 短期及び長期目標と具体的対応策。

大学	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 大学教員の研究に基づく保育① 大学教員を助言者として招聘した園内研究の実施③
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 大学教員の専門性を生かすことで、幼児の遊びの広がりや深まりが期待できる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 発達心理学専門の大学教員による調査を共有。 虫博士、芋博士として専門知識を生かした指導。 幼児教育専門大学教員による研修への参加。 教員への具体的保育の指導。

教員間	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 相互参観⑩ 小学校参観① 合同カンファレンス④ 情報交換①
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 幼児・児童の発達特性や指導方法の相違点、具体的事柄を通して、直接的に学ぶ。 育てたい資質・能力の共通理解を図ることができる。 保育方法、指導方法の改善に役立てている。 発達の連続性や道筋を実際の子供の姿から学ぶ。 連携する上で、大切にしたい子供たちの経験、教員の援助（指導）の在り方を考える。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 方向性を共通にして、保育実践、授業実践に取り組む。 1年生の授業のねらいや課題を保育に反映させる取組。 相互参観と共同カンファレンスによるカリキュラム及び指導方法の見直し。 保育実践、授業実践の意見交換を行う。

人事交流	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 人事交流②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 幼小交流の質の向上につながる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 小学校教員との人事交流。 幼児教育に造詣の深い教員の1年生担任への配置。

研修

日常的なミーティング	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 幼児の育ちを捉える④ 幼児理解②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 幼児理解と保育力の向上につなげる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 主体的・対話的な深い学びを捉える。 幼児の育ちを支える保育について理解する。 経験の履歴を基に、子供の育ちを捉える。

カンファレンス

取組	<ul style="list-style-type: none"> エピソード記録の共有と考察⑩
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 学年間の子供の育ちの確認。 幼小中のつなげる姿の明確化。 子供の姿と教師の援助について話し合い、保育の質の向上につなげる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 教師の環境構成や援助と、幼児の姿の変容、発達についての分析。 小学校移行へとつながるプロセスの検討。 テーマに沿って、子供の姿を考察する。 探究し、思考する過程を明らかにする。 育みたい資質・能力に関わるような記録をとる。 資質・能力の一体的な育成を図る。 P D C Aサイクルの確立。

日常的なミーティング

取組	<ul style="list-style-type: none"> 幼児の育ちを捉える④ 幼児理解②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 幼児理解と保育力の向上につなげる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 主体的・対話的な深い学びを捉える。 幼児の育ちを支える保育について理解する。 経験の履歴を基に、子供の育ちを捉える。

保育実践

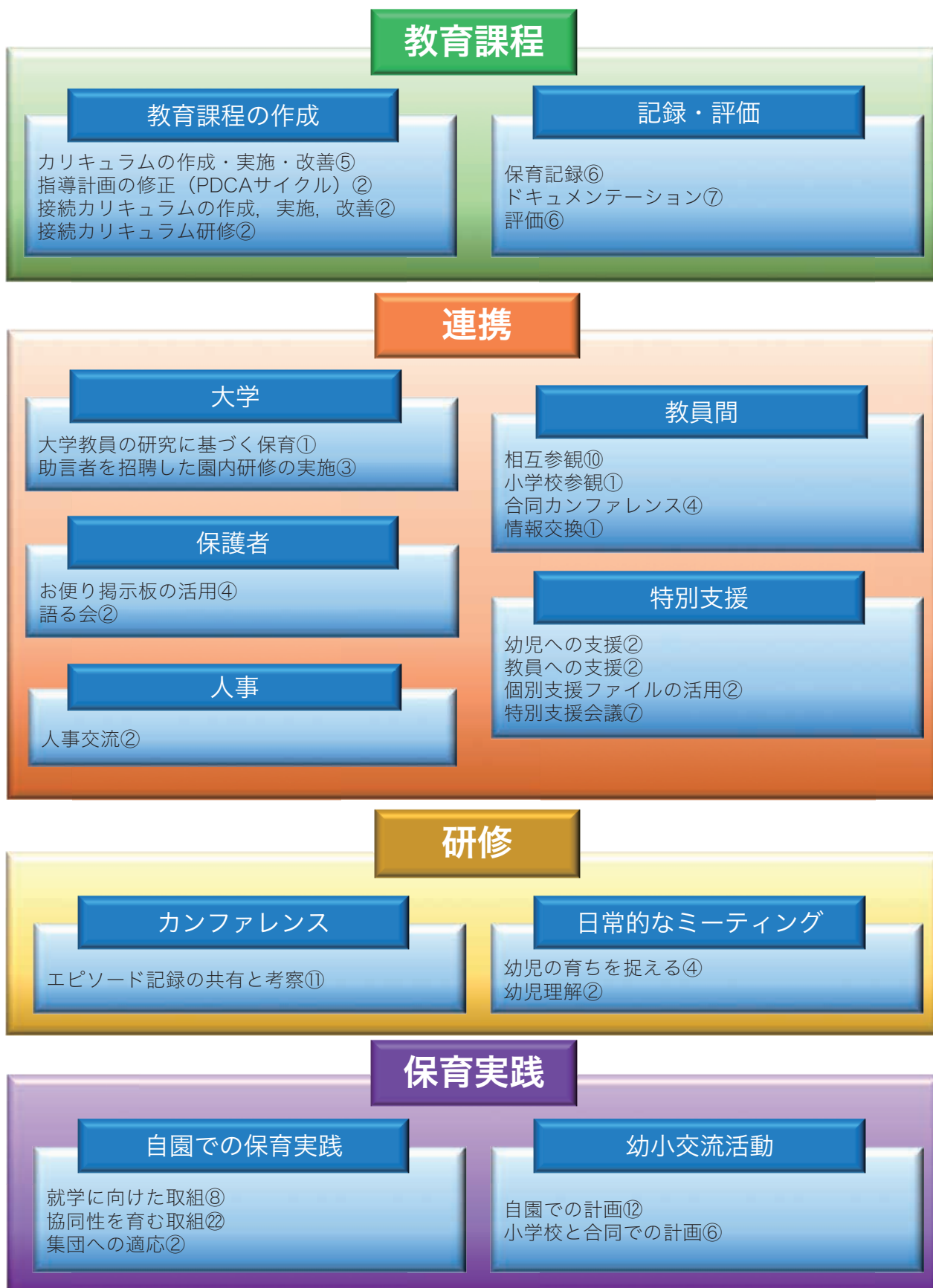
幼小交流活動

取組	<ul style="list-style-type: none"> 自園での計画⑫ 小学校と合同での計画⑥
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 憧れや刺激を遊びの発展につなぐ。 小学校への興味や憧れを抱き、自信、期待を高める。 子供の姿を中心に話し合うことで、幼稚園では長期的な育ちの見通しをもつことができ、小学校では幼稚園教育について理解することができるようになる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 年長児と小学生の合同授業を試行する。 アプローチカリキュラムの工夫、改善。 幼稚園教員が、自園で、教科学習の導入を行う。 授業時間だけではない、自然な交流の機会。 幼小の教員が合同で、指導案を作成する。 異年齢探究活動の実施。(5歳から小2まで) 幼小双方の教員が一年間の大まかな方針と計画を立てる。 小学校教員と単元の流れ、授業内容を検討。 小1プロブレムの課題を視野に入れた研究。

自園での保育実践

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就学に向けた取組（生活習慣，見通しをもった生活）⑧ ・ 協同性を育む取組② ・ 集団への適応②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校就学への不安の解消。 ・ 折り合いをつける経験。 ・ 経験を活かして自分の力を発揮し，友達と思いを出し合いながら進めていく楽しさや満足感を得ることができる。 ・ 園児同士，園児と教員が話し合いを積み重ねながら，保育実践を行い，学びを深める。 ・ 子供が自己肯定感を高めることができる。 ・ 体験することが，子供の知的な部分を刺激し，学びの基礎となる意欲や，探究心につながる。 ・ 友達とつながる力や集団の中で自己発揮する力を付ける。 ・ 安定した園生活を送ることができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校での給食体験の実施。 ・ 小学校のトイレの使い方の確認。 ・ 小学校で使用する物品に触れる。 ・ 遊びの振り返りの発表。 ・ 小集団で活動する。 ・ 自分の思いや考えを表す。 ・ 「意見を言う」「話を聞く」などのやり取りができる機会。 ・ 発表や話し合い活動の設定。 ・ オリジナルストーリーの制作。 ・ 年長児2クラス合同で取り組む活動。 ・ 実現に向けて，自ら計画を実践する体験をする。 ・ ソーシャルスキルトレーニング。 ・ 人との関わり方を身に付けていく保育を展開。

【視点2 関係図】



【視点2 まとめ】

教育課程

幼小接続に留意した指導方法を工夫するにあたっては、その基となる、教育課程の編成・改善、評価についての取組が多く挙げられた。そこで、これらの取組をまとめて「教育課程」の категорияに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

- 教育課程の作成については、小学校教員と幼稚園教員が子供の発達段階を確認するとともに、教育内容やつきたい力、関わり方や指導方法などについての理解を深めた後、幼小合同で接続カリキュラムを作成している。
- 外部（園に在籍していた元職員、研修等で関わる教育委員会関係者、小学校教員等）からそれぞれの視点で評価を受け、さらに改善していく取組も見られた。
- 評価については、保育記録やドキュメンテーションを工夫する取組が多く挙げられた。

② ①の見えた成果

- 幼稚園と小学校、互いのカリキュラムや子供の育ちについて共通理解を図っていくことができるといった効果が見られた。
- ドキュメンテーションにより、幼児が明日への意欲をもったり、満足感を感じたりできるとともに保護者や小学校教員に向けて、子供の育ちやそこに至るまでの過程を伝えることができた。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

視点1と同様に、教育課程の作成・見直しに際しては「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに小学校教員といかに共有し、共に作成することができるかが重要である。

連携

幼小接続に留意した指導方法を工夫するにあたって、大学、保護者、教員間などの外部と連携した取組が見られた。そこで、これらの取組をまとめて「連携」の категорияに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

- 大学教員の専門性を生かした取組が見られた。
- お便り、掲示板を活用したり子供の育ちを語る会を開いて子供の姿を発信し、保護者に子供の育ちや幼小接続への理解を深めたりする取組が見られた。
- 幼稚園と小学校、双方の保育、授業を参観する機会を設けている。
- 小学校生活と幼稚園生活の具体的な姿や、教師の意図について情報共有し、大切にしたい子供たちの経験や教師の援助（指導）の在り方について考えたりする機会を設けている。

② ①の見えた成果

- 大学教員の専門性を生かすことで、幼児の遊びの広がりや深まりが期待できる。
- 幼児・児童の発達特性や指導方法の相違点、具体的事柄を直接的に学ぶことができる。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

各所との連携を通して、幼児の遊びの広がりや深まりが期待できるとともに、小学校教員との連携において、育てたい資質・能力の共通理解を図ることの重要性が見えてきた。

研修

幼小接続に留意した指導方法を工夫するにあたって、カンファレンスや日常的なミーティングを設定する取組が見られた。そこで、これらの取組をまとめて「研修」の категорияに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

- 小学校教員とのカンファレンスでエピソード記録の共有と考察を行っている。
- 小学校教員との日常的なミーティングで幼児の育ちを捉える機会を設けている。

② ①の見えた成果

- 子供の姿と教師の援助について話し合うことで、保育の質の向上につながっている。
- 幼児理解と指導力の向上につながる。
- 小学校教育の前倒しではなく、幼稚園の子供の発達を小中学校へつなげるという意識を全員で共有する機会になり、小学校入学後の姿を見据えた保育の実践を行うことができる。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

教員同士で普段から子供の姿と援助を語り合い、幼児理解と指導力の向上につなげるとともに、小中学校へつなげるという意識を全員で共有することで、小学校入学後の姿を見据えた保育の実践を心掛けることが大切である。

保育実践

幼小接続に留意した指導方法を工夫するための保育実践の取組が多く見られた。そこで、これらの取組をまとめて「保育実践」の categoriaに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

〈自園での取組〉

- 幼児が自ら見通しをもち、創り出す活動に取り組むといった協同性を育む活動が見られた。
- 幼児の不安を解消し、スムーズな就学を支援する就学に向けた取組が見られた。
- 幼児の社会性を育む活動が見られた。

〈交流活動〉

- 幼稚園と小学校の教員が合同で、指導案の立案や、一年間の大まかな方針と計画を立てて実施している取組が見られた。
- 小学生への憧れにつながるような活動を幼児の遊びに盛り込む取組が見られた。
- 幼稚園児と小学生で異年齢共同探究活動の取組が見られた。

② ①の見えた成果

- 集団において子供が落ち着いて生活をしたり、情緒の安定を図ったりしながらより良い人間関係を築いていくことができる。
- 幼児は、小学校への興味と憧れを抱き、安心感や期待感を高めることができる。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

幼児のもつ小学校への不安や期待に着目した保育実践を行うことの重要性がうかがえた。また、不安を払拭するための取組や期待を高めるための取組の多様性が確認できた。

① 視点3 「小学校教育との共有を図るために」

教育課程

教育課程の見直し	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程の改善・修正② 教育課程の発展・充実②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 共通の観点で子供の姿を見取ることができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 前年度の反省を踏まえて行う。 互いの実践や、課題、反省等を話し合い、教育課程の改善に生かす。 子供の姿を中心に協議し、次年度に生かす。 見直す観点を明確にする。 具体的な子供の姿から、資質・能力の定義付けを行う。

接続期	
取組	<ul style="list-style-type: none"> スタートカリキュラムの作成⑥ 小接続教育課程の作成③
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 子供の育ちの履歴や見通しをもって指導にあたることができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> スタートカリキュラムを基にした授業づくり。 幼稚園教員による子供理解の内容を伝えながら見直しを図る。 相互の見取りの違いを明らかにし、改善に生かしていけるようにする。 共同で作成し、共有する。 幼児期の経験を踏まえ、各教科等の最初の単元を子供の主体性が発揮されるような授業になるよう工夫した。

特色ある教育課程	
取組	<ul style="list-style-type: none"> 幼小一貫教育① 園独自で開発した接続カリキュラム②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> 幼小一貫した評価・観点・指導。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> 上下関係だけではない多様な関係が生まれるようにする。

参観・体験	
取組	<ul style="list-style-type: none"> • 互いの教育を理解するための公開研究会④ • 小学校教育を知るための授業参観② • 教育観や実態を知るための相互参観⑧ • 幼児教育を理解してもらうための体験③ • 子供を見取る視点の共有③ • 小学校教員に対する幼児理解アンケート①
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> • 参観時期を適切にすることで、その時期の幼児や児童の理解を深める。 • 小学校での授業を理解した上で、子供の遊びを援助することができる。 • 体験を行うことで、児童への適切な援助につながる。 • 次年度へ継続することができた。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> • 子供の姿を中心に協議し、次年度に生かす。 • 幼児期後半で扱ったものや、活動内容を1年生担任に伝え、学習活動の参考にする。 • 幼児期の後半と小学校の月を互いに見合っ、改善と共有を図る。 • 参観の時期に留意する。(幼稚園修了間近、入学初期など) • 参観後に協議会を設ける。

特色ある教育課程	
取組	<ul style="list-style-type: none"> • 幼小連絡会⑩ • 引継資料の工夫⑤ • 就学に向けた参観② • 特別な支援を要する幼児の情報交換⑦ • 幼児理解を深める研修会①
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> • 幼児の学びを引き継ぐことで、なめらかな接続を図ることができる。 • 具体的な幼児の姿を補足しながら引き継ぐことで小学校教員の幼児理解につながる。 • 担任以外も引き継ぎに関わる事で、幼児を多面的な見方から捉えることができるので適切な援助や支援を継続することができる。 • 特別支援コーディネーターと連携を図ったり、個別支援計画を作成したりすることで、進学後も継続的に支援を行うことができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> • 引き継ぎの際は、それぞれの幼児の学びや、それに伴う援助などを具体的に伝える。 • 幼稚園で活用している学びの履歴を小学校教員にも具体的な幼児の姿を補足しながら説明して渡す。 • 連絡会や引き継ぎの会議では担任だけでなく、養護教諭や栄養教諭、管理職などが参加し、幼稚園側も小学校側も全体での受け入れ体制を整えることができるようにする。 • 特別な支援を要する幼児については、特別支援コーディネーターや支援学校教員、保護者などと連携し、個別の教育支援計画を作成する。

幼児理解	
取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目指す子供像の共有③ ・ 子供の姿を共有する連絡会② ・ 育ちを見取る調査研究①
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子供像を共有することで、教育課程の編成や、交流活動、就学などに役立てることができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主に個のとらえ方や、遊びの意味などについて、理解を深めるようにする

外部	
取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連絡会① ・ 異校種と連携した会議③ ・ 共通のテーマを設けた研修会⑤ ・ 共同研究① ・ 保護者向けの発信① ・ 保護者も交えた研修会① ・ 保護者向けの就学支援② ・ 小学校への発信① ・ 附属小学校との人事交流① ・ スクールカウンセラーとの連携③ ・ 特別支援コーディネーターとの連携④ ・ 特別支援学校との連携② ・ 大学との連携②
成果可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別の支援計画は、幼稚園から中学校まで統一した形式を作成し、引き継ぐことができるようにする。 ・ 保護者も安心して、小学校の就学を迎えることができる。 ・ テーマや視点を定めることで具体的な協議につながり、異校種同士の理解が深まる。
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 異校種と協議や研修会を行う際は、テーマや視点を定めて行う。 ・ 就学健康診断が始まる時期から、保護者の就学への不安に寄り添い、情報提供や小学校の雰囲気を知る機会を設ける。 ・ 幼小中兼任のカウンセラーが観察や支援を行うことで、継続的な支援につながるようにする。

保育・授業実践

単元・授業づくり	
取組	<ul style="list-style-type: none">・ 公開研究会の単元開発②・ 共同計画⑤・ 小学校の授業づくり①・ 合同保育の実施・指導案作成③
成果可能性	<ul style="list-style-type: none">・ 共通の学びを意識して保育・授業を作り上げることで、互いの子供理解や指導の理解につながる。
留意点	<ul style="list-style-type: none">・ 幼児・児童の実態や単元のねらいについて話し合いを行う。

交流活動	
取組	<ul style="list-style-type: none">・ 教育課程との関連付け③・ 小学校教員と連携した単元開発④・ 交流会で目指す子供像の共有②・ 発達段階を踏まえた系統的な指導①・ 交流活動のもち方や具体的な進め方⑩
成果可能性	<ul style="list-style-type: none">・ 話し合いや振り返りを設けたり、共同で計画したりすることで、見通しをもって活動を行うことができる。
留意点	<ul style="list-style-type: none">・ 幼稚園での遊び方や、学び、環境構成などを伝える。・ 交流のねらいや、目指す子供の姿を明確にする。

【視点3 関係図】



【視点3 まとめ】

教育課程

視点1, 2について, 小学校教員との共有を図るために, 教育課程の見直しを行ったり, 接続期を定めて接続期カリキュラムを作成したりする取組が多く挙げられた。そこで, これらの取組をまとめて「教育課程」の категорияに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

- 相互の教育の違いを理解した上で, 指導の観点や評価等を共有し検討する取組が見られた。
- 幼児期後半及び小学校入学当初の子供の姿を捉え, 接続期カリキュラムを編成する取組が見られた。
- 編成した教育課程を実施した後は, 幼児期後半で扱ったものや活動内容を1年生担任に伝え, 学習活動の参考にしたり, 幼児期の後半と小学校の月を互いに見合って, 改善と共有を図ったりしている取組が見られた。

② ①の見えた成果

- 教育課程を子供の実態に合わせて改善・修正を行い, 一層の充実を図ることができた。
- 教育観や幼児・児童理解の認識を共有し, 幼稚園の教育と小学校教育との滑らかな接続の中で, 見通しをもった指導を行うことができた。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

幼稚園教育と小学校教育の違いを理解した上で, それらを円滑に接続させるために, 共に接続期カリキュラムの編成を行ったり, お互いの活動内容を共有できるような機会をもったりできるような場の設定が重要である。

連携

視点1, 2について, 小学校教員との共有を図るための教員間や外部などとの連携も多く挙げられた。そこで, これらの取組をまとめて「連携」の categoriaに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

- 幼児期の子供の姿を小学校教員に理解してもらうために, 日常的な参観や, 公開研究会の参観, 保育体験などの取組が挙げられている。
- 幼児教育と小学校教育との滑らかな接続を目指して, 就学支援の幼小連絡会を行う。
- 特別な支援を要する幼児に対しては, 小学校教員との連携のみならず, 特別支援コーディネーターやスクールカウンセラーなどとも連携を図る取組が見られた。

② ①の見えた成果

- 保育を参観したり, 体験したりすると小学校教員も具体的な幼児の姿を捉えることができるため, 就学に際しての連絡会などでも幼稚園での子供の学びが伝わりやすくなる。
- 幼稚園で作成している学びの履歴やドキュメンテーションを提示することで, 幼児の姿や発達, 援助等が具体的に伝わるようになった。
- 幼小中と長期的で継続した支援を行うことができた。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

小学校教員との共有を図るためには, 保育・授業参観や保育体験などを通して, 幼児期の子供の姿や小学校での生活の姿をお互いに理解することが重要である。

保育・授業実践

視点1, 2について, 小学校教員との共有を図るために, 単元・授業づくりや幼小交流活動が非常に多く挙げられた。そこで, これらの取組をまとめて「保育・授業実践」の 카테고リーに分類した。

見えてきたもの

① 見えた取組の実際

〈単元・授業づくり〉

- 幼児・児童の実態や単元のねらいについて話し合いを行い, 共通の学びを意識して保育・授業を作り上げる取組が見られた。
- 5歳と6歳の子供の姿を分けて捉えず, 共通のねらいの基で, 指導を行う取組も見られた。

〈交流活動〉

- 交流活動のもち方や具体的な進め方についての例が多く挙げられた。

② ①の見えた成果

- 共通の学びを意識して保育・授業を作り上げることで, 互いの子供の発達についての理解や指導の在り方や方法の理解につながった。
- 交流活動を共同で計画したり, 交流活動後に話し合いや振り返りを設けたりすることで, 見通しをもって行うことができるとともに, 深い相互理解とより良い活動への発展へとつなげることができた。

③ ①②から見えてきた幼小接続のポイント

視点1, 2について, 小学校教員との共有を図るためには, 教員同士で幼児・児童の実態や単元のねらいについて話し合いを積み重ね, 共通の学びを意識して保育・授業を作り上げたり, 交流活動を設定したりすることが重要である。

(3) 協力園の幼小接続の取組状況報告

48園から「幼小接続の取組状況報告」を受けた中、抽出した6園の幼小接続の取組を紹介する。

岩手大学教育学部附属幼稚園

1 幼小接続に関する園の特徴

(1) 園の立地について

本園は、道路を隔てた向かい側に附属小学校、同じ敷地内に附属中学校、車で15分ほど離れたところに附属特別支援学校が立地している。附属小学校との幼小接続は、道路を挟んでいるので気軽に日常の行き来はできないが、交流活動や引き継ぎ、互いの教育の参観、公開研究会参加等、年間交流を計画的に進めてきている。



第1回幼小交流活動「春のケーキ作り」
—ペアの相手を知り親しみをもつ—

(2) 園の幼小接続の特色

(1)にもあるように、日常的な行き来の回数は少ないが、大きく4つのことに取り組んでいる。1つ目は、学年末や年度初めの引き継ぎにより子供一人一人の様子について細やかに情報共有する。2つ目は、担任や生徒指導担当による保育や授業の参観をし集団の育ちやその中での一人一人の育ちについて理解する。3つ目は、互いの公開研究会に参加し、それぞれの研究における重点や視点について学ぶと共に、時に生活科のアシスタントティーチャーになるなど、授業を構想し授業に参加する。4つ目は、年長児と1年生とで年間4回の幼小交流活動を計画し、事前・事後の話し合いをもち、教育課程や指導計画も見合い、学びや体験内容の理解をする。これらを通し、子供の内面理解や教育活動の理解・共有の機会としている。

(3) これまでの幼小接続の取組（経緯）

年度末や年度初めの引継ぎは、以前から行われているが、平成12年度から、学年末に小学校の授業を参観したり、小学校の生活の一端に触れたりする機会を設けてきた。小学校への期待をもったり不安を解消したりするよさがあった。その後徐々に、交流活動の機会を増やしたり、幼小の教師と一緒に活動内容の検討をしたりするようになった。平成20年には、生活科の中に幼小交流活動が位置付いた。その他にも、休み時間にプールを借用したり、低学年集会活動に招待いただいたり、お弁当と一緒に食べる体験をしたりすることもあった。平成29年度から幼小の交流活動や引き継ぎ等の中で、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』や5歳児年間指導計画をもとに、幼児の体験や学びについて幼小の教師同士で理解することを進めてきている。

今年度は、幼小交流活動の計画・実施・反省の中で、接続を見通した子供の学びをより共有していくために、幼稚園としてどのような工夫ができるかに取り組んでいる。

2 小学校教育との接続に関わる取組と内容

(1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために

① 週案、月指導計画を活用した評価

各担任が毎週作成する週案に、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』から子供の姿を読み取り、接続に留意した評価の工夫をしている。さらに、学年会においては、チームで保育しているよさを生かし、評価もチームで行い、幼児の行動の意味や背景の理解を多様な視点で行い、次の育ちにつながるような実践や指導の改善に生かしている。また、今年度は、月末にその月の指導計画の検討会をし、指導計画の見直しを行っており、小学校との接続に向けて、いつでも幼稚園教育について発信できる準備につなげている。

② 交流活動計画の作成・実施・改訂 ※取組の実際

年間4回の幼小交流活動を行う際には、4月に前年度の成果や反省をもとに、年間の活動の見直しを立てている。実施に当たっては、各回毎に事前の計画（P）実施（D）事後の反省・改善（CA）を幼小の教員（年長組担任団、1年生担任団）で行っている。その際には、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』や5歳児年間指導計画、1年生の生活科単元指導計画をもとに、幼児の体験や学びについて教師同士理解する機会を作ると共に、指導計画の見直しに反映している。

(2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために

① 接続を意識した日々の取組

・『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を手掛かりにしながら、日々の保育記録や週案の子供の姿の評価をし、翌日の保育構想や育ちの見通しをもちながら保育実践を行う。
・各年齢の中でも、協同的な遊びや活動を積み上げ、その中で一人一人その子らしさを発揮し、幼児同士試行錯誤しながら活動に取り組み、活動を楽しむ過程を大切にする保育に努めている。



② 幼小交流における園内での話し合い

幼小交流活動においては、幼小の教師同士で事前・事後の話し合いを通し、一緒に指導案をたてねらいにある姿の共有をしたり、活動自体が楽しく夢中になるよう一緒に教材研究をし、教材のもつ価値や可能性を共有したりしている。さらに、事前・事後の話し合いをする前に、園内で教材の可能性、環境構成や援助の方向性、捉えた子供の体験や学びについて接続を意識した協議をし、幼小教師間での話し合いにも生かす。

【幼小教師間の話し合い】

③ 保護者への発信

日々の様子を伝えるクラスだより、園だより、保育参加のミーティング、保護者会等において、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を盛り込みながら子供の姿を発信し、保護者に子供の育ちや幼小接続への理解を進めている。

④ 個に応じた指導の共有

学部特別支援教育の教師や附属特別支援学校支援部の教師との月1回の参観と指導助言、年度末の幼小の引き継ぎ時にも参加をいただき、一人一人の内面の読み取りとその子に合った援助や支援の情報を共有する体制を作り、園内はもとより、幼小間において継続した支援が行えるようにしている。

(3) 小学校との共有を図るために

① 体験や学びの発信から活動内容の見直し

幼小交流活動に関わり、関連ある幼稚園での各年齢の遊びの姿について、その体験や学びを発信し、その教材のもつ可能性を協議する機会をもっている。そのことにより、新たな目的を見出し、教科とのつながりを共に考えたりなど、互いに豊かな保育や授業の展開につなげる。

② 年度当初の話し合いのもち方

幼小交流活動の年間の見通しをもつ年度当初の話し合いは、当事者となる幼稚園年長組担任、小学校1年生担任に加え、前年度年長組担任、教務主任や研究主任等も集まり、幼小交流活動の年間の方向性を検討する。このことにより、互いの教育課程や指導計画につなげながらの話し合いの機会としている。

③ 特別支援の取組

学部の特別支援教育の教師や附属特別支援学校支援部の教師による幼小の参観と指導助言、附小生徒指導担当の幼稚園参観等を継続的に行い、子供の育ちや支援の方向性を共に協議する機会をもつ。さらに、年度末には、これらの教師が集まり、幼小の引き継ぎ会を行い、継続した支援が行えるための情報共有をする。

【連携から接続へのプロセス】

(1) 自園は現在どのプロセスにあるか

ステップ2とステップ3の途中

(2) 自園のプロセスについて ～経緯と今後の計画～

これまで日々の保育実践において、週案の改善や学年会、月の指導計画検討会等において接続に留意した評価ができるよう工夫改善をしてきた。また、幼小交流活動を機会に、幼小の教師が共に、年長児の発達を『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』から読み取り、共通の言葉で子供の姿を語る事が重ねられるようになってきている。さらに、円滑な接続に向け、互いの教育課程や指導計画にも目を向け、連続性を考えながら実践・協議することにも取り組んできた。特別支援においても、学部や附属特別支援学校の教師らとの連携の下、幼小において継続した支援が行える体制作りができてきている。

これらをもとに、接続を見通した教育課程の編成を幼小で検討する機会へつなげ、接続を意識した話し合いから接続期カリキュラムの編成へと進めていきたい。

宇都宮大学教育学部附属幼稚園

1 幼小接続に関する園の特徴

(1) 園の立地について

本園は宇都宮市中心部松原に附属幼稚園、小学校、中学校の3校園が併設されており、日常的に教職員、園児児童生徒の交流・連携が行われている。また約2km西に附属特別支援学校が有り、徒歩や自転車などでの交流が可能な距離にある。転勤などの理由を除けばほぼ全ての年長児が附属小学校への連絡進学をしている。ただし、大学とは約5km離れており、学生や大学教員との日常的な連携などに難しい状況にある。



【園のシンボル六角形の遊戯室】

(2) 園の幼小接続の特色

昨年度から大学を巻き込んで大学と附属の連携研究がスタートした。各教科および幼児教育を含む13のプロジェクト研究が始まった。幼稚園は生活科・道徳科・幼児教育の3つのプロジェクトに属し大学・小・中と共同で研究を行っている。そこでは共同でスタートカリキュラムを作成したり、生活科の授業指導案を作成したりなど行っている。年長児の後半の時期では保育時間が延びることもあり、小学校の昼休みに低学年の庭に行き年長児と一緒に遊んだり、また小学生が園庭に来て一緒に遊んだりしている。また、幼児に関しては後期、月1回であるが年長組が小学校の給食を園で食べる。そこでは小学校の栄養教諭が給食についての話をしたり、不安なく小学校の給食に接することができるような話をしたりしている。

(3) これまでの幼小接続の取組（経緯）

本園はこれまでも小学校との接続を意識した研究を協同性、体の動き、特別支援教育、規範意識の芽生えなど、様々な角度から行ってきた。その中で、小学校との様々な交流、教師同士の交流、幼稚園と小学校での同じ題材での保育及び授業（道徳）、小学校、中学校の教員の研究協力などを手掛かりに、主に幼児期の教育の質の高まりの視点で、自分達の保育の質の向上を目指すことが多かった。昨年度より幼小中及び特別支援、大学教員との合同プロジェクトが立ち上がり、これまで以上に共に研究する体制が整ったところである。

2 小学校教育との接続に関わる取組と内容

(1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために

① 教育課程の改訂

本園の従来の教育課程『暮らしづくりと教育課程』を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、資質・能力の三つの柱との関連、近年の本園の幼児の実態に照らし合わせ、教育課程の見直しを日々の保育の営み（PDCA）と、研究保育を基本とした保育カンファレンスをもとに『幼児期に育みたい資質・能力と教育課程』として改訂を試み、公開研究会他、各研究会において地域の幼稚園に紹介している。（平成30年度）

② 5歳児の仲間と共に遊び込んでいく姿から小学校につながる学びを捉える

幼児の「もっとやりたい」思いの積み重ねから生まれる深い学びについて、1年間の保育の振り返りから、幼児の経験の広がりや深まり、それらを支えている要因について幼児の内的要因と外的環境要因について分析している。自分達の興味関心のある遊びの中で遊び込んでいく中に幼児は多様な学びをしている。小学校の特に生活科におけるねらいに照らし合わせて捉え直してみることで、小学校での姿につながる学びを再確認し、教育課程の見直しに生かしている。

③ 心理学的側面からも幼児の変容を捉え、5歳児の生活の在り方を再確認する

幼稚園の行事の前後による幼児の育ちに着目し、心理学的側面からの変容を大学教員とともに調査・検証し、5歳児の行事前後の生活の在り方を再確認するとともに、教育課程の見直しに生かしている。

④ 「もの（素材・教材）」との出会いから生まれる学びを視点としたカリキュラムマネジメント

本園が長年研究を重ねてきた「もの（素材・教材）」との出会いから生まれる学びを確かなものにするためにもものを視点としたカリキュラムマネジメントについて、発達の時期に応じて実践、検証を重ね、小学校での活動に生かしている。

(2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために

① 多様な協同する経験を意識した保育実践

これまでの本園の研究の成果として、幼児期後期における協同する経験を多様にできるように、特に5歳児の幼児理解、保育内容、時期に応じた保育の在り方について工夫を重ねている。

② プロジェクトでの保育・授業参観と検討

生活科プロジェクトを中心に、幼児期の生活と遊びの中での学びと小学校の生活科における学びについて、保育、授業を共に参観、検討を重ねている。視点児童について幼児期及び生活科での取組について比較、分析、考察し、幼児期の経験が小学校での学びにつながっていることを検証しているところである。

③ 交流活動の内容、方法検討（小学校への見通しがもてる交流活動へ）

小学校の生活科の単元の中で、幼児との直接的な関わりを重視し、対話する授業を通して、小学校への不安を軽減し、期待が高まるよう小学校教員と単元の流れ、授業の内容など検討している。

(3) 小学校との共有を図るために

① 目指す学びの道筋を共有する

目指す子供像と育みたい資質・能力を共通にして、研究に取り組んでいる。生活科プロジェクトの中では、「経験を生かし、対象への関わりを楽しむ～幼・小の子供の考えたり、表現したりする力を軸に～」というテーマのもと、プロジェクトで目指す学びの道筋として、目指す子供像を幼児期後期（5歳児）：「やりたいことに向かって自分なりに考えたり、試したりして繰り返し活動に取り組む姿」、1～2年生：「対象について繰り返し関わったり考えたりして、自分に自信を持つ姿」とし、方策の方向性を共通にして、保育実践、授業実践に取り組んでいる。特に、振り返りの大切さを意識し、幼稚園での一つ一つの活動の中で振り返る経験も大切であると捉えている。

② 幼児期後期から小学校入学前後のカリキュラムの共有

幼児期後期からの連携プログラム、小学校のスタートカリキュラムの関連を双方の教員で検討し、互いに伝え合っている。今後、共同してさらに改善を図っていきたい。また、本園の特色でもある「もの（素材・教材）」との出会いから生まれる学びを確かなものにするために、幼児期後期（5歳児）で扱ったことのあるものや、活動内容を1年生担任に一覧表として伝え、特に生活科、図画工作科などでの活動の際の参考にしている。

③ 個々の幼児の引継ぎ

特に配慮が必要だった幼児だけでなく、全園児について指導要録ともに、幼稚園での様子、援助の在り方などについて新担任へ引継ぎをしている。また、幼小中と同じスクールカウンセラーが特別な支援を要する幼児の引継ぎや保護者のサポートなど必要に応じて関わっている。

【連携から接続へのプロセス】

(1) 自園は現在どのプロセスにあるか

ステップ3

(2) 自園のプロセスについて ～経緯と今後の計画～

本園はこれまでも小学校との接続を意識した研究を協同性、体の動き、特別支援教育、規範意識の芽生えなど、様々な角度から行ってきた。その中で、小学校との様々な交流、教師同士の交流、幼稚園と小学校での同じ題材での保育及び授業（道徳）、小学校、中学校の教員の研究協力などを手掛かりに、主に幼児期の教育の質の高まりの視点で、自分たちの保育を見直してることが多かった。昨年度より幼小中及び特別支援、大学教員との合同プロジェクトが立ち上がり、これまで以上に共に研究する体制が整ったところである。本園は幼児教育プロジェクト、生活科プロジェクト、道徳プロジェクトに属し、大学教員を交えて研究を進めている。特に、生活科プロジェクトにおいては、生活科の単元作り、授業案検討を共に行い、幼児期後期から小学校低学年での学びのつながりについて検証しているところである。今、行っている研究をもとにさらに実践に生かしていきたい。

また、幼児の具体的な生活の面では、5歳児後半に学校給食を幼稚園で食べるようにしたり、小学校の庭に遊びに行きながら小学生と自然に触れ合う機会を作ったり、対話を大切に、人と人との関わりを通じた交流授業の中で、小学校生活に期待をもてるようにしたりするなど安心して小学校へ向かえるようなステップを実施している。どちらについても幼稚園、小学校の教員同士で次年度に生かせるように話し合いをする機会を設けている。

信州大学教育学部附属幼稚園

1 幼小接続に関する園の特徴

(1) 園の立地について

本園は、信州大学松本キャンパス敷地内に附属幼稚園、小学校、中学校の3校園が併設されている。例年5歳年長児の98%以上が附属小学校への連絡進学をしており、さらに附属小学校の校舎が園舎のすぐ隣にあり、直接つながる通路があることから、幼児・児童及び教員同士の交流や連携がしやすい立地条件となっている。附属校園の連携研究テーマが「未来を拓く学校づくり」として、幼小中一貫校を目指していることから、それぞれの学校文化を大切にしながらも12年間の学びをつなぐ幼小中接続に取り組んでいる。



【幼小での語る会】

(2) 園の幼小接続の特色

本園では、平成28年度より本年度までの4年間、文部科学省指定の研究開発学校となり、附属小中学校と共同して幼小中一貫校を目指した12年間の学びを接続する一貫カリキュラムの作成に取り組んでいる。

この目的は、持続可能な開発のための教育として、「たくましく心豊かな地球市民」を育むために、自己表現力・課題探求力・社会参画力を軸として、様々な資質・能力を有機的・総合的に育む幼小中一貫教育としての教育課程と指導・援助、評価を開発することである。

(3) これまでの幼小接続の取組（経緯）

本学校園では、これまでに保育や教科、領域、諸活動などに関する数多くの研究実績を積み重ねてきたが、ともするとそれらが幼稚園、小学校、中学校における取組の実現にとどまり、幼小中を貫く系統的な展開がなされてきていない傾向がみられた。

そこで、平成28年度から令和元年度までの4年間の文部科学省の研究開発校を通じて、各校園の実践に通底する本学校園の教師の教育観やそれに基づく実践を精査し、学びの主体者である子供の12年間の豊かで確かな学びを支えようと、三校園共同テーマ「たくましく心豊かな地球市民」を育む12年間の教育課程の開発に着手してきた。

2 小学校教育との接続に関わる取組と内容

(1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために

① 保育の参観と子供の遊びの意味を幼小中の職員で語り合う

まずは、幼稚園の遊ぶ子供の姿の中に、12年間を貫き通す学びの原点があるのではないかと考え、小学校と中学校の教員が、幼稚園の子供の遊ぶ姿を参観したうえで、合同カンファレンスを行った。そこでは、子供の遊びの意味やその先の小学校や中学校の授業でも何を大切にしていかなければならないかを話し合うこととなった。そこでは、子供たちに内在する三つの資質・能力を見出し、これを軸にして様々な資質能力の他の要素を巻き込みながら問題の解決の手順や方法を自覚し、整理し、どの状況で使えるか判断しながら、より質の高い問題解決を行うことができる教育課程や指導・援助の在り方、評価を実践研究していくこととなった。

② ラウンドテーブルで実践を語り合い省察する

1週間の遊びの流れや教師の援助や環境構成による遊びの変化、幼児の発達の様子を週や月、年間の教育課程を記録し累積している。それらの実践を園内研修会の実践を語る会や園内研究会、幼小合同研修会、信州ラウンドテーブル（年1回）、公開研究会（隔年開催）で実践を持ち寄って語り合い、省察をしている。

③ カリキュラム開発ワーキングチームの取組み

カリキュラム開発ワーキングチームを月に1回、幼稚園の遊び部会、幼小接続部会、小中接続部会など、各部会ごとに実践を持ち寄って教育課程の編成や指導援助の在り方、評価の在り方などについて校種をまたいで、大学の共同研究者とともに実施した。それを研究推進リーダーである幼小中研究主任会（年30回）で調整し、推進委員会（年12回）に指導助言を経て、幼小中全職員による合同職員会（年13回）で報告、小グループによる実践の語り合いなどを踏まえてブラッシュアップしていった。

(2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために

① 実践を語る会

幼小中の三校園の職員が、月に一回ある合同職員会で時間を設け、それぞれの保育や授業の実践を語り、意見や感想を伝え合う機会を設けている。ここでは幼稚園児の遊びの姿のVTRを全員で視聴し、その姿や援助の意味や価値を話し合うこともあった。小中学校へ幼稚園での指導や援助を引き継いでもらい、指導の工夫をつなぐ良い機会となっている。

② 5つのカンファレンスと保育記録 ※取組の実際

学級担任と副担任が、毎日その日の子供の遊びの様子を振り返り、子供の「思い」を支えるための援助の在り方について語り合う「学年カンファレンス」や、週に一度、各クラスで集まり、遊びの環境について語り合う「環境カンファレンス」、保育に関わる悩みや幼児教育にキーワードをテーマとして前担任での「語る会」がある。また、担任が研究会で話題にしたいことを予めテーマとして定め、研究保育を行い、その他の担任は、記録した子供の様子から事例を挙げ、テーマに沿って子供の姿を考察して事例発表する「研究保育」や学年カンファレンスでは捉えきれない長期的な視点で子供の姿を変えていく。以前と最近の姿を比較し、子供の育ちを支えた要因を探りながら自分たちの援助を評価していく「学期毎の振り返り」などを行っている。

③ 特別支援コーディネーターの幼小への指導

園内では、幼小共通の特別支援コーディネーターが、1～2ヶ月に1回来園し、特別な配慮を要する幼児について、どのような環境でどのような保育を展開したら良いのか指導と相談を担当と行っている。特に5歳児については、就学に向けた相談をしている。コーディネーターには、小学校へスムーズに適応できるように、幼児の発達や幼稚園での保育の様子について情報を共有するための小学校との架け橋となってもらっている。

(3) 小学校との共有を図るために

① 単元共同開発

幼小職員が保育や授業を観た上で、小学校の授業づくりに幼稚園の職員もアドバイスをしてほしいと要望があり、小学校の授業の構想や単元展開の在り方などについて意見を述べ、幼小協働で低学年の領域に関する授業づくりをしている。

② 教育課程の見直し

前年度作成した附属幼稚園と附属小学校、附属中学校の12年間の教育課程について、幼小中の全教員が月に1回集まり、お互いの実践や課題、反省等を語り合い、それを踏まえて教育課程や指導計画の改善や修正をしている。

③ 特別支援コーディネーターの幼小への指導

幼小共に、特別支援学校の特別支援コーディネーターにお越しいただき、進学する特別な配慮を要する幼児や小学校に進学後の児童について参観いただき、入学前後の情報共有や指導援助の在り方、保護者への援助等を幼小共同で行うようにしている。

【連携から接続へのプロセス】

(1) 自園は現在どのプロセスにあるか

ステップ3～4の途中

(2) 自園のプロセスについて ～経緯と今後の計画～

本附属学校園では、連携研究テーマ「未来を拓く学校づくり」のもと、接続を見通した12年間の教育課程の編成と実施をするとともに、学期末や年度末に実践の省察と反省をすると共に、その評価や検証を行い、PDCAサイクルを確立し、次年度以降の改善につなげようとしている。今後は、自己評価や追跡調査や外部評価などを受け、幼小中一貫校を目指し、さらに幼稚園から教育課程と指導・援助、評価（子供の見方やとらえ方）などを小中へとつないでいくために、継続的に研究を推進していきたい。

神戸大学附属幼稚園

1 幼小接続に関する園の特徴

(1) 園の立地について

本園は、附属小学校と共に明石キャンパス内に併設されている。1クラスの定員は20人で、各学年2クラスずつの3年保育であり、附属小学校に全員連絡進学する。

(2) 園の幼小接続の特色

他に類を見ない54にも及ぶ詳細な観点の「資質・能力カリキュラム」により幼小のカリキュラムを接続している。

(3) これまでの幼小接続の取組（経緯）

本校園は、これまで歴史的に、幼小（中）が連携してカリキュラム開発を行ってきており、文部科学省の研究開発学校の指定を受けてきている。

近年では、平成12年から平成14年まで文部科学省研究開発学校指定研究を受け、幼稚園入園から中学校卒業までの子供の学びの過程を整理し「学びの一覧表（本園研究紀要35参照）」を作成した。その研究過程において、幼小中12年間を見通した、子供の学びを見取る共通カリキュラムを作成し、その実践を「10視点カリキュラム」として深めていった。

平成14年度以来、幼稚園と小学校の教師が、互いに学び合い、成長すると共に、学びの連続性を保障し、幼小接続期の子供にふさわしいカリキュラムを作っていこうと考え、5・6歳児が合同で同一内容の保育・学習をする「合同保育・学習」の実践を積み重ねている。この取組は、幼小の教師が、互いの保育について理解を深め、互いの教育のよさを学び合う手段として非常に有効であり、互いの教育内容や方法にも影響を及ぼしている。また、子供自身が小学校を自分の生活空間の一部だと認識し、小学校進学に対する期待を高め、不安を軽減することにも繋がっている。

そして、平成22年度から平成24年度まで、文部科学省研究開発学校の指定を受け、研究開発課題「幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法の研究開発」を行った。

続いて、平成25年度から平成28年度まで、附属小学校と共に文部科学省研究開発学校の指定を受け、研究開発課題「幼稚園と小学校の円滑な接続に資する、子供の学びに着目した、幼児教育と小学校教育9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる『初等教育要領』の開発」を行なった。さらに、平成29年度からは延長指定を受け、研究開発課題を「幼稚園と小学校の円滑な接続に資する、子供の学びに着目した、幼児教育と小学校教育9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる『初等教育要領』の充実」に取り組んでいる。



【改造途中の園庭の一角】

2 小学校教育との接続に関わる取組と内容

(1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために

① 「事実」を基に「学び」でつなぐ、「資質・能力カリキュラム」の開発

幼小で共通の観点を持ち、「事実」に基づく子供の「学び」を根拠にカリキュラムの開発と充実を継続している。その際、同じ観点で子供たちを見つめ育むことが重要であると考えた。本園では、以前使用していた「10視点カリキュラム」を資質・能力の観点から見直し、「資質・能力カリキュラム」を編成した。本園の「資質・能力カリキュラム」における「資質・能力」の観点と「5領域」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を明らかに示し、「5領域」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に示されていることを含みこんでいることを確認している。本校園が共通で使用している「資質・能力カリキュラム」における「資質・能力」の観点は54を数える。観点が詳細で明確であることによって、幼稚園における遊びや生活の全てと小学校における教科の内容の全てにおいて、「資質・能力カリキュラム」での幼小の接続が可能になっている。

② 実践記録とドキュメンテーションなどを用いた根拠のあるカリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントを日常的に意識して行えるように、職員室内に初等教育要領（研究開発学校としての取組）、教育課程、月の指導計画を貼り出し、事実からの検討事項をいつでも書き込める状況を作る取組も継続している。そして、学期の終わり毎に、日常的な気付きや確かめたいと考えたことを、実践記録やドキュメンテーションなどを根拠にカリキュラムを改善している。

実践記録においては、遊びや生活を通して、一人一人の子供たちが既に獲得している資質・能力を発揮し、互いに刺激し合うことでさらに一人一人の資質・能力の発揮が促され、それらが複雑に

絡み合いながら資質・能力が伸長していく過程を可視化し、カリキュラムの改善に資する知見を
集積する書式の開発を行い、園内研修に位置付けて継続的に取り組んでいる。また、ドキュメン
テーションにおいては、写真やイラストなどを交えながら子供の思考の過程を様々な手法で可視化
していることに加え、学びを別枠で記述し、データとして活用しやすい工夫についても園全体の
取組として継続している。これらは子供の「事実」を根拠に「学び」を記述している。これら
をカリキュラム・マネジメントに活用することで、根拠のあるカリキュラム・マネジメントを
実現している。以上のように、担任の保育実践が、園のカリキュラムを改善する仕組みを
構築している。

(2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために

① 保育指導案の計画・実践・評価

遊びや生活の中の具体的な子供の姿を資質・能力の観点毎に捉えている。そして、その具体的な
子供の姿を基に、資質・能力の観点毎にねらいを設定し、遊びや生活の具体的な場面での資質・能
力を発揮、伸長した子供の姿を予想して評価の観点を設けている。予想した子供の姿につながる
環境の構成と教師の援助についても資質・能力の観点毎のねらいにつながる教師の意図と行為を
セットにして詳細に記述することで明確に評価することを可能にしている。

② 遊びや生活のまとまりとしての計画・実践・評価

長期に渡って取り組む遊びや生活においては、子供の発達に伴って、時期と共にねらいやねら
いの重点のかけ方が変化していく。教師は、長期にわたる遊びや生活全体を通した先に願う子供
の成長までも見通した上で、環境の構成や教師の援助を計画するべきだと考える。しかし、一定
の時期をひとくくりにして、様々な遊びや生活を一緒に書き表している一般的な長期の指導計画
では、ねらいやねらいの重点のかけ方の変化、活動全体を見通した先に願う子供の成長の見通し
を含めて書き表すことは難しい。そこで、子供の育ちにとって必要と考える遊びや生活を一つの
まとまりとして計画することで、いつの時期にどのような子供の学びがあると予想するのか、よ
り鮮明にイメージし、長期の見通しをもつ。そして、学びや発達を見通してどのように環境の構成
や教師の援助を工夫していく。これらの取組により、より見通しをもって子供の学びと発達の連
続性を保障できると考える。

(3) 小学校との共有を図るために

① 小学校との連携研究により創造し、充実させる「資質・能力カリキュラム」

幼小で、具体的な子供の学びを基にし、資質・能力の定義づけを行い、「資質・能力カリキュ
ラム」の編成を行った。そして、保育・学習参観及び振り返り、実践後のカリキュラムへの知見の集
積を、資質・能力の観点により行い、充実を進めている。さらに、1年生の学習構想に幼稚園の職
員も加わり、1年生の学習を幼児期の経験を踏まえ、より子供の発達に即したものにしていこう
とすることにも取り組んでいる。

② 幼小の指導案を一つにする交流実践 ※取組の実際

指導案を一つにするということは、年長児と1年生のねらいや指導方法を共通にするというこ
とであり、してあげる・してもらおうという固定した子供の関係を、教師が作ってしまわないこと
を意図した幼小の子供の交流実践である。この実践を通じて、年長児と1年生の発達や指導方法
の共有を図りつつ幼小の教師が学び合い、共に成長したいと考えている。

年長児と1年生の担任が、年長児と1年生の双方の子供にとって意味のある実践を創り出そう
と一緒に合同保育・学習を構想する。実践前には実践時期や子供の発達に照らして、ねらい、展
開、環境の構成や教師の援助などを具体的に検討する。実践後には、さらによりよい保育・学習に
なるように、幼小の教師と一緒に事実を基に実践を振り返る。これらの取組の中で、今まで当たり
前と思っていたことを、幼小の教師が互いに異校種の教師になぜかと問われる。そこで、違いを理
解し合おうとしたり、互いの子供観や教育観にゆらぎをもたらしたりする。

年長児と1年生の合同保育・学習では、年長児担任と1年生担任で構想、実践、評価を継続して
おり、接続期にふさわしいカリキュラムと指導方法を明らかにしようとしている。

【連携から接続へのプロセス】

(1) 自園は現在どのプロセスにあるか

ステップ4

(2) 自園のプロセスについて ~経緯と今後の計画~

幼小が共にカリキュラム開発を積み重ね、共通したカリキュラムの観点で一貫性を図り、構造
化することで、幼小のカリキュラムの接続を可視化すると共に、カリキュラムの改善の仕組みを
確立し、カリキュラムの改善を継続して積み重ねている。

香川大学教育学部附属幼稚園

1 幼小接続に関する園の特徴

(1) 園の立地について

本園（3・4・5歳児各1学級）は坂出市に位置しており、高松市にある高松園舎（4・5歳児各1クラス）と合わせて1園として運営している。互いに20km離れた所に位置しているため、それぞれが隣接している小学校との接続を推進している。

香川大学は坂出市と高松市の2地区に附属学園を有し、特徴や重点を相違させることで地域貢献を進めている。坂出学園は、以前より交流活動や幼小中特の合同行事を実施してきた実績を生かし、幼小中の一貫教育を柱に掲げている。昨年、幼小中12年間の教育を通して目指す子供の姿と発達観を「自主・自律」「共生・協同（働）」「探究・創造」の3点から捉え直した。



【小学校から幼稚園が見えたよ~小学校体験~】

(2) 園の幼小接続の特色

互いの教育への理解なくして教育課程の接続や充実、よりよいスタートカリキュラムの実施はないと捉え、積極的な幼稚園教員と小学校教員の交流を継続している。

また、修了間近の2月中旬、年長児が小学校体験（3日間）を行っている。気心が知れた幼稚園の友達とともに小学校の環境や生活、先生などに親しんでいく中で、小学校へ安心や期待をもてるようにしている。内容は小学生との交流活動が主であるが、幼児の気持ちに合わせて、幼稚園教員が教科学習の導入を行い、自信を培っている。さらに、小学校体験終了後、小学校での出会いや気付きを生かした遊びを展開し、面白さを感じることで、小学校入学の期待が高まるようにしている。

(3) これまでの幼小接続の取組（経緯）

平成15年より、年長児の小学校体験を実施している。当初は6月と2月に1週間ずつ行っていたが、幼児期には幼児期にふさわしい生活をする重要性と、小学校体験のねらい（小学校教育へ期待を高め、残りの幼稚園生活を豊かにすること）の共通理解により、現在の内容となった。

2 小学校教育との接続に関わる取組と内容

(1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために

① 幼児と児童の交流活動計画の作成 ※取組の実際

幼稚園の教育課程と小学校の生活科などの年間計画を照らし合わせながら、交流の内容と時期を設定する。年長児1クラスに対し小学校は2クラスあるため、年長児と各クラスの児童の特徴が生かされ、全ての学び（ねらい）が深まることを目的に話し合う。今年度は、小学校西組と「夏野菜と冬野菜を育てよう」、東組と「会いたい、一緒にしたい、見せたいから会いに行こう」をテーマに交流している。その年の子供たちに合う内容を決めていく教師同士の協議の中で、互いのねらいや内容、教育方法などの相互理解を深めている。

② 幼小合同研修会・合同連絡会の実施

特別支援教育の視点から、幼稚園と小学校が互いに事例を持ち寄り、子供理解を進めている。幼稚園は、年長児の中から、新しい環境に親しむ過程で配慮をしてほしい幼児の姿について3年間の育ちの様子を具体的に伝えている。つまり、対象児の変容だけでなく、対象児を取り巻く学級の子供たちの変容と教師の支援も示すことによって、幼児期における協同性などの育ちの理解とともに、小学校入学時の教師の支援の見通しがもてるようにしている。

また、昨年よりスクールカウンセラーも交えて実施しており、保護者の願いや入学への不安がより理解できるようになった。そのことにより、事前に小学校入学式に不安を感じている幼児が会場を見学したり、子供の様子についての保護者調査から柔軟に小学校生活環境を変更したりできるようになった。

(2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために

① 「幼児期に育みたい資質・能力」の育成を重視した保育を展開し、広める

私たちは、子供たちが幼稚園生活の中で、豊かな経験を通じて感じたり、気付いたり、分かっていたり、できるようになったりしたことを使って、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりしながら、よりよい生活を営もう、よりよい自分になっていこうとする気持ちを高めている姿や、その姿に対する教師の思いと支援を、毎日記録している（写真も含む）。その記録をもとに見取った代表的な発達の過程を、定期的に保護者に向けて知らせている（「おたより」の発行）。その「おたより」を、小学校教諭に配布している。遊びを通した総合的な指導の中で一体的に育まれている「幼児期に育まれる資質・能力」が生きる力の基礎となり、小学校以降の教育における各教科などにおいて育まれる「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力などの育成」「学びに向かう力、人間性などの涵養」の基盤となることを提示している。

② 幼稚園修了間近に年長児が小学校体験を行う

（上記1(2)を参照）

(3) 小学校との共有を図るために

① 幼稚園と小学校の教員が共同でスタートカリキュラムを作成する

スタートカリキュラムを作成するにあたり、ねらいを小学校生活への「適応」ではなく「安心」「期待」「自律」とした。まず、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導となるよう5歳児の動画をもとに教員間で話し合ったが、これに関しては「どのような姿をどう捉えるか」が重要であり、幼稚園教員がもっと主体となるべきだったと反省している。

「人とのかかわり」「ものやこと（物的環境や時程）とのかかわり」「各教科などにおける学習」の3つの観点からカリキュラムを作成しており、「人とのかかわり」「ものやこととのかかわり」は、保護者からのライブ調査を生かし柔軟に取り組んでいくことで大きな成果があった。今後、児童の「教科などにおける学習」への期待に応えるカリキュラムや教師の在り方を模索していく必要性を感じている。

② 幼小連携支援員（幼稚園に配置）と幼稚園教員が、小学校スタート時に積極的に参観する

幼稚園教員の積極的な参観によって、上記①の内容を見取ることができた。しかし、「各教科などにおける学習」の見取りは、参観時間に限りがあり困難であった。しかし、幼小連携支援員や大学教授が行うことで効果が期待できる。今後の幼稚園教員と小学校教員の協議によってカリキュラムを改善していくことが重要である。

③ 小学校の教員（1年生の支援員）が幼稚園生活を体験する

5歳児の3学期の後半に、来年度の1年生の支援員が幼稚園生活を体験している。5歳児との関係づくりとともに、幼児の経験をともに経験し、児童へのふさわしい援助の一助としている。

【連携から接続へのプロセス】

(1) 自園は現在どのプロセスにあるか

ステップ4の中で、協議時間の捻出に努力している

（教師間の交流が年間計画に明記されているまでは至っていない）

(2) 自園のプロセスについて ～経緯と今後の計画～

坂出学園の教育の柱「幼小中の一環した学び」に向け、12年間の子供たちの発達を「自主・自律」「共生・協同（働）」「探究・創造」の3点から育む実践とその発信に取り組んでいく。幼児期にふさわしい教育と義務教育以降の各教科などの学習を通しての教育の実現、そして、それらの接続カリキュラムのふさわしさを追求していく。

現在、小学校入学におけるスタートカリキュラムの作成と実践まで至っており、今後は「入学児童の各教科などにおける学習への期待に応えるカリキュラム」をキーワードとした改善を行っている。

長崎大学教育学部附属幼稚園

1 幼小接続に関する園の特徴

(1) 園の立地について

本園は長崎大学の敷地内ではないが、隣接した場所に位置し、附属小学校・附属中学校と隣同士の場所にある。3歳児は1学級、4歳児は2学級、5歳児は2学級の計5学級を有し、現在131名の園児が在籍している。

自由保育を基本にしており、お弁当や降園前の集まりで集団活動を行うが、それ以外は園児が好きな遊びを自分で選び、遊び込んでいくという保育形態である。そのため、園内の様々な場所で異年齢の園児が交わって遊ぶ姿が多く見られる。

本年度の本園の教育目標は、『「したい、知りたい、やってみよう」がいっぱいの幼稚園』とし、子供たちが興味をもったことを自分たちで積極的にできるように環境を整えたり、支援を行ったりしている。



【幼稚園での給食試食会】

(2) 園の幼小接続の特色

本園の園長、担任、養護教諭はすべて長崎県公立小学校からの人事交流で転勤してきており、附属小学校の教員にも顔見知りが多い。園長と小学校長との関係も良好であり、日常の連携体制も整っている。年長児と1年生の交流だけでなく、食育の面から、小学校の栄養教諭や幼稚園の養護教諭が相互に給食やお弁当の様子を参観し合い、その後の指導に生かしている。

その他に附属中学校とも連携体制は整っており、毎年中学3年生が2つのグループに分かれて本園園児と交流に訪れる。

(3) これまでの幼小接続の取組（経緯）

幼小接続は20年以上前から取組がなされており、毎年、具体的な内容の改訂を加えながら現在に至っている。1年生の生活科授業への園児の参加に始まり、現在では教員同士の情報交換や授業参観・保育参観も行われている。双方の研究発表会にも、それぞれが参加している。

2 小学校教育との接続に関わる取組と内容

(1) 小学校教育への接続に留意した教育課程を工夫するために

① 連携・交流計画の作成

毎年、年長担任と1年生担任が、その年の連携計画を話し合い、それに従って交流を進めている。幼小連携は大切であるが、決して双方の負担につながらないように留意して進めている。

② 年度末の情報交換

年度末には指導要録のコピーを抄本として小学校に送付しているが、その他にも気になる子供の情報を確実に小学校に伝えるために、年長児担任が小学校に行き、口頭で情報を伝えるようにしている。また、3月末は、まだ1年生担任も決まっていない状態での情報伝達であるため、6月にも1年生担任と幼稚園教諭との情報交換会を開催している。1年生担任と子供たちが出会った後であるため、小学校教諭からの質問が多く出る。

③ 教育学部支援ラボとの連携

教育学部内に文部科学省の予算を活用して、「特別支援教育支援ラボ」という組織がある、学部の特別支援教育を専門にしている先生をはじめ、附属特別支援学校の元教員らで構成され、附属4校園に在籍の、特別な配慮を要する子供に関する相談や通級指導教室などを行っている。

本園には、毎月初めに支援ラボの先生が複数名で訪れ、本園教員からの相談に対して適切な指導をしていただいたり、また、卒園児の小学校での情報を伝えてもらったりしている。多様な子供が増えている現状の中、大変心強い存在となっている。

④ 食育における連携 ※取組の実際

以前から、本園保護者向けの「ミニ講座」の一環で、附属小学校の栄養教諭が食に関する講演を行っていたが、その準備や実施後に栄養教諭が本園園児のお弁当の様子を観察に来たり、本園の養護教諭が1年生の給食の様子を観察したりして、それぞれの食育指導に生かしている。

(2) 小学校教育への接続に留意した指導方法を工夫するために

① 小学校就学に向けて

- ・ 「幼児期の終わりまでの育ってほしい姿」や、昨年度からの研究テーマである「幼児の自己肯定感の育成」等を視点とした日々の保育実践とその記録に努めている。
- ・ 5歳児の保育において、各行事では園のリーダーとして自覚をもつよう、年中や年少のお世話を積極的にするよう支援している。また、卒園間近のV期においては特に、集団行動や集団としての意識が高まるような遊びを多く取り入れて連帯感を味わわせている。

② 指導計画を見直すPDCAサイクル

- ・ 月初めに「〇月の保育計画」を作成し、日々の遊びの記録を付けながら保育を見直し、月末にはその月の遊びの様子をまとめた「〇月の遊びの図」を作成している。保育計画も遊びの図も、全職員で共有している。
- ・ その遊びの図をまとめたものが、翌年の指導計画に反映される。

③ 大学の専門教員を交えた年3回のカンファレンス

- ・ 現在本園は3学期制であるが、毎学期の終わりには長崎大学教育学部の幼児教育コースの3名の先生を園に迎え、担任が作成したその期の事例をもとに、子供の姿に関するカンファレンスを実施している。
- ・ 長崎県教育委員会の幼児教育担当指導主事を園に招いて指導をしてもらう際にも、幼児教育コースの3名に声をかけ、園内研究にも参加してもらっている。

④ 学部教員の保育への参加

- ・ 教育学部に在籍している教員の専門性を保育に生かしている。生き物が専門の教員を「虫博士」、栽培が専門の教員を「イモ博士」、物理が専門の教員を「ピタゴラ博士」と呼び、年長さんの保育で、その専門知識を生かした指導をお願いしている。
- ・ 国語の教員から「幼少期の語彙習得」についての研究協力依頼や、美術の教員から、ある特殊素材を使った園児の遊びについての研究依頼があるので、次年度以降、随時協力していく。
- ・ 学部教員で学校での勤務がない者を対象に、附属校園で実習を行う取組がある。本年度は幼稚園で技術科の先生（副学部長）の実習を受け入れた。合計20回保育に入る。

(3) 小学校との共有を図るために

① 教員同士の情報交換

- ・ 年度末と新年度6月に子供についての情報交換を実施している。
- ・ 年度初めには、その年の取組の計画を確認する。

② 子供同士の交流

- ・ 年に2回、1年生の生活科授業に年長児が参加する。
- ・ 1年生の給食の様子や、小学校の長縄大会を年長児が参観する。

③ 幼稚園の「ミニ講座」に小学校教員が講師で参加

- ・ 2学期には、小学校の栄養教諭が食育について、本園保護者に講話を行っている。
- ・ 本講座の3学期は、小学校の教員が入学前の準備について話をしている。

【連携から接続へのプロセス】

(1) 自園は現在どのプロセスにあるか

ステップ2

(2) 自園のプロセスについて ～経緯と今後の計画～

現在、全国の附属校園では「働き方改革」を進めることが命題となっている。今後の計画を進めるにあたっては、教師の負担増につながらないことを最重要のポイントとして考えていきたい。

その上で、園児が進学する附属小学校との連携の在り方を見直し、実現可能な取組を目指していきたい。現在進めている連携や協力の取組は維持しながら、内容の精選をしていく。

そして、まだできていない、お互いの教育課程への位置付けを考えていきたい。

【幼小接続の取組状況報告における考察】

○ 岩手大学教育学部附属幼稚園（40頁～41頁）

幼小接続の取組として、交流活動の計画・実施・反省の中で、接続を見通した子供の学びを共有していくための幼稚園の工夫が挙げられている。具体的には、幼小交流活動の年間の見通しをもつために年度当初に幼稚園年長担任、小学校1年担任に加えて、前年度年長担任、教務主任、研究主任等による交流活動の検討により、幼小の相互の教育課程や指導計画につなげる話合いの機会をもつことや、交流活動について、教材の可能性・環境構成・援助の方向性・捉えた子供の体験や学びについて接続を意識した協議を十分に園内で行った上で、幼小教員間での話合いを行っていることである。

今後は接続を見通した教育課程の編成を幼小で検討する機会を設定し、接続を意識した交流活動から接続期カリキュラムの編成のための話合いへと取組が発展していくことが期待される。

○ 宇都宮大学教育学部附属幼稚園（42頁～43頁）

幼稚園、小中学校及び特別支援学校、大学教員による各教科及び幼児教育を含む13のプロジェクト研究を行っている。中でも生活科プロジェクトを中心に、幼児期の生活と遊びの中での学びと小学校の生活科における学びについて、保育・授業参観を相互に行い検討を重ねていることは、接続を意識した研究組織づくりと共同研究推進において、参考になる。

幼稚園で長年研究を積み重ねてきた「もの（素材・教材）」との出会いから生まれる学びを視点としたカリキュラムについて、発達の時期に応じて実践・検証を重ね、小学校に伝えるなど、幼児期後期から小学校入学前後のカリキュラムを幼小の教員で検討・共有し、生活科や図画工作科の活動に生かす取組は、今後、PDCAサイクルを含めた接続カリキュラム編成の発展が期待される取組である。

○ 信州大学教育学部附属幼稚園（44頁～45頁）

幼小中一貫校を目指した12年間の学びを接続する一貫カリキュラムの編成と実施についての具体的な取組が大きな特徴である。数多くの研究実績の積み重ねを幼小中を貫く系統的な12年間の教育課程とするために、子供の学びの姿から12年間の学びの原点を見出す幼小中の教員による合同カンファレンスや遊びの姿や援助の意味・価値を話合う「実践を語る会」、毎月1回行われる教育課程や指導計画の改善・修正のための話合い、幼稚園の保育参観など、幼小中の一貫した接続のために継続的に実践とその省察・評価・検証を行っている。

PDCAサイクルの確立や次年度以降の改善にもすでに取り組んでおり、今後は自己評価や外部評価・追跡調査などを受けたさらなる研究の推進が期待される取組である。

○ 神戸大学附属幼稚園（46頁～47頁）

文部科学省研究開発学校指定研究を受けての長年にわたる「幼稚園と小学校の円滑な接続に資する、子供の学びに着目した、幼稚園教育と小学校教育9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる『初等教育要領』の開発・充実」への取組は、幼小が連携したカリキュラム開発として多くの優れた知見の蓄積がある。幼稚園と小学校が共通に使用している「資質・能力カリキュラム」における54にも及ぶ「資質・能力」の観点が詳細で明確であることによって幼稚園での遊びや生活の全てと小学校における教科の内容全てにおいて「資質・能力カリキュラム」での幼小接続を可能にしている。

カリキュラムマネジメントを日常的に意識して行うための、担任の保育実践が園のカリキュラム改善につながる仕組みの構築や、幼小の指導案を一つにして接続期にふさわしいカリキュラムと指導方法を明らかにする取組は、具体的に幼小のカリキュラム接続の可視化やカリキュラム改善の仕組みの確立・カリキュラム改善の継続を目指すために参考となる。

○ 香川大学教育学部附属幼稚園（48頁～49頁）

教育課程の接続や充実、より良いスタートカリキュラムの実施を目指して、幼稚園教員と小学校教員が互いの教育の理解のための積極的な交流を継続している。幼稚園の教育課程と小学校生活科などの年間指導計画を照らし合わせながら、子供たちの実態に合わせて教師同士の協議の中でねらいや内容、教育方法などの相互理解を深めている。また、幼稚園から「幼児期に育みたい資質・能力」の育成を重視した保育を展開し、教師が継続的に記録したものを保護者や小学校教員に発信する取組は、幼稚園教育への理解を広げる参考になる。

現在すでに小学校入学におけるスタートカリキュラムの作成と実践まで至っており、今後は「入学児童の各教科などにおける学習への期待に応えるカリキュラム」をキーワードに取り組むなど、さらなる改善・発展が期待される取組である。

○ 長崎大学教育学部附属幼稚園（50頁～51頁）

食育の面から、小学校の栄養教諭と幼稚園の養護教諭が互いに給食や弁当の時間を参観し、情報交換を行うなどの連携を行っていることや、教育学部に在籍している教員により、物理の教員を「ピタゴラ先生」とするなどして専門性を生かした保育を行っていることが、幼小接続の取組の特色として挙げられる。

指導計画を見直すPDCAサイクルの確立と学部教員の保育への参加などにより、教育課程の改善にも取り組んでいる。このように自園の教育課程の質を高めたり内容を精選したりすることや、現在進めている連携や協力の取組を継続することにより、今後、幼小相互の教育課程へ位置付けし、確実に実施されるなどの一層着実な取組が期待される。

(4) 特色ある取組のグルーピングと整理

「B 幼小接続に関する取組の実際」では、各園の幼小接続において特色を表している取組を一つ挙げていただき、詳しく報告書にまとめていただいた。49 の取組事例が集まり、本園で、幼小接続の段階や似ている取組などでグルーピングを行った。また、次頁より全事例を掲載し、各園で実施する幼小接続に関する取組の参考になるようにした。

はぐくむ

園内研修

小学校教育との接続を意識して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「特別支援」を踏まえて幼児を見取っていく園内研修を行っている。また同様に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた保育実践を展開し、小学校教育への円滑な接続を目指している。

番号	園名	取組の実際	視点	掲載頁
1	北海道教育大学附属函館幼稚園	保育週案と保育ミーティング	(2)	56
2	弘前大学教育学部附属幼稚園	小学校への学びのつながりを意識した研修の積み上げ	(1)	57
3	宮城教育大学附属幼稚園	保育記録とカンファレンス	(2)	58
4	山形大学附属幼稚園	特別支援コーディネーターと共に行う接続支援	(2)	59
5	茨城大学教育学部附属幼稚園	週案研修会	(1)	60
6	静岡大学教育学部附属幼稚園	園内研修での話し合い（事例検討会）	(2)	61
7	三重大学教育学部附属幼稚園	幼児の姿を見取る視点の工夫	(2)	62
8	佐賀大学教育学部附属幼稚園	「ポートフォリオ」（個人ドキュメンテーション）による情報共有	(3)	63
9	熊本大学教育学部附属幼稚園	評価指標を活用した幼児の学びの捉え	(2)	64
10	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	個人用ドキュメンテーション	(3)	65

保育実践

番号	園名	取組の実際	視点	掲載頁
1	群馬大学教育学部附属幼稚園	振り返りの活動及び学級での話し合い「子ども会議」	(2)	66
2	千葉大学教育学部附属幼稚園	「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた保育実践	(1)	67
3	山梨大学教育学部附属幼稚園	「幼小接続カリキュラム」を踏まえた指導方法の工夫	(2)	68
4	滋賀大学教育学部附属幼稚園	グループで共通の目的に向かう活動（5歳児後半）	(2)	69
5	奈良教育大学附属幼稚園	協同性を育む「きぐみたいむ」（年長5歳児合同保育）	(2)	70
6	宮崎大学教育学部附属幼稚園	附属幼稚園に係る就学支援協議会	(3)	71

とむにつくる1

教育課程

幼小部会を組織し「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や保育・授業参観等を手掛かりに幼小の教員が協力して、接続期の教育課程（アプローチ・スタートカリキュラム）を作成している。

番号	園名	取組の実際	視点	掲載頁
1	東京学芸大学附属幼稚園	幼小交流活動における合同指導計画作成の活用	(3)	94
2	新潟大学教育学部附属幼稚園	幼小接続カリキュラムの作成と実践	(1)	95
3	富山大学人間発達科学部附属幼稚園	幼小連携交換保育（授業）	(3)	96
4	鳥取大学附属幼稚園	遊びの具体的な姿を小学校と共有するために	(3)	97
5	島根大学教育学部附属幼稚園	未来創造科WG	(2)	98
6	広島大学附属三原幼稚園	幼小接続期カリキュラムの開発	(1)	99
7	山口大学教育学部附属幼稚園	教育課程に位置付けた計画的交流と必要感から創り出す交流	(2)	100
8	鳴門教育大学附属幼稚園	「科学的思考力や学びを接続し発展させる」取組	(2)	101

つながる

教員間連携

教師間連携では、保育・授業を参観したり、研究内容や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた幼児の姿の捉えを紹介したりして互いの理解を深めている。また、幼小交流活動では、互いが協力して交流活動を計画・実施し、見直しを図っている。

番号	園名	取組の実際	視点	掲載頁
1	北海道教育大学附属旭川幼稚園	フォトカンファレンス	(2)	72
2	福島大学附属幼稚園	スタートカリキュラムの見直しと改善	(3)	73
3	福井大学教育学部附属幼稚園	「投げる」動作・遊びの多様性を小学校の学びへとつなげる	(2)	74
4	京都教育大学附属幼稚園	幼小で互いの授業・保育を見合う	(3)	75
5	兵庫教育大学附属幼稚園	異校種の教育についての理解の推進	(1)	76
6	長崎大学教育学部附属幼稚園	幼小連携における食育指導の実際	(1)	77
7	大分大学教育学部附属幼稚園	「グローバル人材の育成」の素地を育む	(1)	78

幼小交流活動

番号	園名	取組の実際	視点	掲載頁
1	岩手大学教育学部附属幼稚園	年長組と1年生との交流活動計画の作成・実施・改訂	(1)	79
2	秋田大学教育文化学部附属幼稚園	就学へ向けた子供同士の交流	(2)	80
3	宇都宮大学教育学部附属幼稚園	小学校への見通しがもてる交流活動へ	(2)	81
4	埼玉大学教育学部附属幼稚園	交流活動における小学校教員との連携	(3)	82
5	お茶の水女子大学附属幼稚園	機を捉え、環境面で配慮する交流	(2)	83
6	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園	互恵性で持続可能な幼小交流活動	(1)	84
7	上越教育大学附属幼稚園	交流活動「幼稚園で一緒に遊ぼう」～入学したばかりの1年生を幼稚園に招く～	(1)	85
8	愛知教育大学附属幼稚園	生活科の交流授業を通して、小学校教員と学び合う（カンファレンスと実践記録）	(2)	87
9	大阪教育大学附属幼稚園	小学校との継続的な交流	(1)	88
10	広島大学附属幼稚園	小学校（子供・教員）との交流活動	(1)	89
11	香川大学教育学部附属幼稚園	幼小交流における『小学校体験』の改善	(3)	90
12	愛媛大学教育学部附属幼稚園	幼・小による交流活動	(3)	91
13	高知大学教育学部附属幼稚園	交流活動	(3)	92
14	福岡教育大学附属幼稚園	近隣の小学校（宗像市立赤間小学校）との交流	(2)	93

ともにつくる2

見直し・改善

幼小部会で作成された教育課程について、互いの授業・保育参観や幼小交流活動、互いの保育・授業実践記録等を基に恒久的に評価・改善を図っている。また「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとしながら、幼児や児童の実態等を踏まえて見直しを図っている。

番号	園名	取組の実際	視点	掲載頁
1	信州大学教育学部附属幼稚園	幼小中共同の保育・授業実践を語るカンファレンス	(2)	102
2	神戸大学附属幼稚園	幼小の指導計画を一つにする交流実践	(3)	103
3	奈良女子大学附属幼稚園	幼小教員が協働して教育実践における教員の意図を言語化する一幼小一貫した評価の観点を立ち上げる	(2)	104
4	岡山大学教育学部附属幼稚園	幼小接続期カリキュラムの見直し	(3)	105

視点	2	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間20回程度
----	---	------	-----	---------	---------

保育週案と保育ミーティング

【取組の実際】

- (1) 北海道教育大学附属函館幼稚園では幼稚園教育要領実施に伴い、平成29年度に保育週案・日案・指導案様式の全面改訂を行った。

その視点としては下記の3点。

- ① 『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を保育週案に盛り込むことによる、日常保育の中での姿の意識化
- ② それに伴っての保育内容に対するエビデンスの強化と質の向上

- ③ 小学校への接続の手段としての資料構築

これらの視点に立った保育週案をもとに、毎週月曜日に保育ミーティングを行っている。保育ミーティングでは、前週一週間の保育内容などの反省の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点でクラスごとに意見交換を行う。今週一週間の計画や保育内容に対する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点での意見交換をクラスごとに行う。こうした毎週の保育ミーティングにより、全教職員が全園児の状況の概要を総体的に把握できるとともに、多くの事例に接することにより育ってほしい姿の捉え方の共通理解がされ、教員の保育の質が向上している。

- (2) 年間の週案や日案の保育内容や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、教師間で共有し「幼児期の『見方・考え方』の育成のためのカリキュラム表」と照らし合わせ日々の実践を改善していく。さらに伴ってアプローチカリキュラムの深化を図った。
- (3) 幼稚園のアプローチカリキュラムと小学校のスタートカリキュラムとを両校園で共有することにより、子供たちの育ちの歩みをより詳しく見るようになった。




【成果と今後の展望】

- (1) 成果

子供たちの育ちを見ると、幼稚園教諭と小学校教諭とが同じ視点・同じ尺度を持って会話ができるようになってきていることが実感でき、引き継ぎにおいてもスムーズな話し合いができるようになってきている。

- (2) 今後の展望

この連携をより発展させ強固にするために、今後は更に密にするために低学年を中心とした教育課程の改善を常に意識した活動を進めていく必要がある。

視点	1	ステップ	2	実施時期・回数	年間・25回
小学校への学びのつながりを意識した研修の積み上げ					
【取組の実際】					
(1) 本園の考える「小学校への学びのつながり」		<p>本園は「幼児期の体づくり～健やかな心の育ちに着目して～」をテーマに研究を進めてきている。その中でも「健やかな心の育ち」については平成29年度から「運動によって体が育てば心も伴って育つこと」や「非認知的能力の育成」に着目して事例検討やドキュメンテーション記録を積み上げてきた。そこで今年度は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と関連付け、「本園の考える挑戦の木」(図1)としてまとめ、子供たちの育ちを支えるような環境構成の工夫や教師の援助に取り組んできた。</p>			
(2) 定期的な事例検討会		<p>「健やかな心の指標・挑戦の木＝小学校への学びに必要な健やかな心の育ち」として捉え、子供の遊びの見取り方や育ちの過程などについてたくさんの意見交流を行ってきた。特に、年長児が育って行く過程の中で大切にしていることとして「年長児の考えた遊びを全園児に提案し一緒に楽しんでもらう経験」についての事例検討を行い、その力をつけるためには年中と年少でどんな遊びや経験が必要かを話し合っている。(図2)</p>			
(3) 小学校授業の積極的な参観を通じた園内研修での話し合い		<p>本園職員は小学校教諭の交流人事で幼稚園教諭になっているという利点を生かして、毎年積極的に小学校の授業を参観し、その後園内研修会でもう一度協議会で話題になったことを情報交換し、指導計画や週案に反映させている。今年度は以下の授業を参観した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月附属小学校との情報交換会での授業参観と7月附属小学校公開研究会への参加 ・8月授業UD研修会への参加 ・10月弘前市小学校生活科・総合的な学習教育研究会の半日研修会への参加 <p>協議会で話題になったことを「健やかな心の指標」と合わせてもう一度話し合い、幼稚園で大切にしたい遊びや経験について年間計画や週案に取り入れ、実践→評価→改善のPDCAサイクルを確立している。</p>			
【成果と今後の展望】					
(1) 成果		<p>① 幼稚園の教育課程を「小学校へのつながり」を意識して見直すことにより、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が明確になった。</p> <p>② 小学校の授業参観を通して、幼稚園教育で大切にしたいことがより明確になり、日々の保育や援助について意識して取り組むようになった。</p>			
(2) 今後の展望		<p>幼稚園教諭の立場になってから小学校の授業を参観すると様々なよさや改善点が見えてくると話題になることが多い。今後も小学校授業参観の機会を逃さず、「だから幼児教育で大切にしなければならぬこと」を明確化するために行っていきたい。</p>			



視点	2	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間・2,2回
----	---	------	-----	---------	---------

保育記録とカンファレンス

【取組の実際】

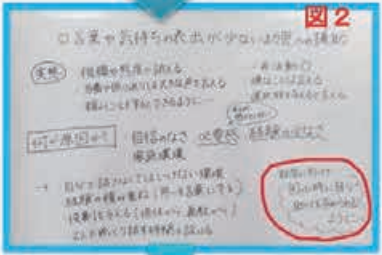
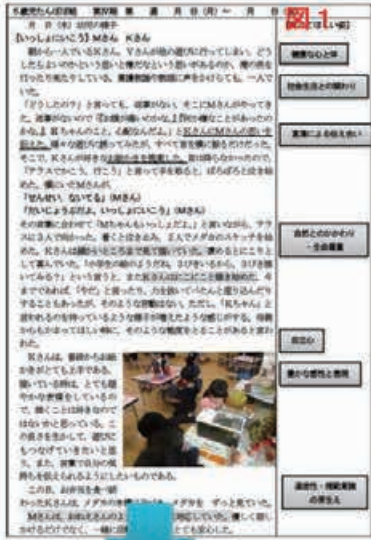
(1) 宮城教育大学附属校園では連携研究テーマを『かかわり合う力』をはぐくむとし、12年間活発に連携に係る活動や交流活動を行ってきた。また、上杉学習支援室を中核に特別な教育的ニーズに応える取組も行っている。しかし、附属幼稚園と附属小学校の接続を考えたときに、小学校への「伝わりづらさ」を感じるがあった。そこで、保育記録と本園で実施している5つの保育カンファレンスを活用して、教育内容の質の向上を図ると共に小学校教員に「幼児期の発達」と『幼児期の終わりまで育ててほしい姿』をどのように生かして保育の質を向上させてきたかを伝えることができるようにした。

(2) 下記は、その一例である。

- ① 年長組担任から保育記録(図1)を基に、言葉や気持ちの表出が乏しい幼児への保育をどうするか「保育環境から見た遊びを捉えるカンファレンス」で提案された。
- ② ①を受けて、養護教諭から「エピソード記述カンファレンス」で①幼児の保健室での記録が提示された。なぜ言葉の表出が乏しいのか話し合い「今後の手立て」と就学に向けて「困ったときに自ら助けを求めることができるようにする」(図2)ことを目標にすることを話し合った。
- ③ ①②を受けて各学年で幼児が「言葉による伝え合い」を楽しむことができるような活動に取り組んだ。年少組では、大学教員と連携して絵本による「感情とその理由を色と言葉で表現する」活動を取り入れた保育記録(図3)を提案した。

(3) 「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」の活用について

- ① 保育記録に「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を記載しカンファレンスに活用したことで、「対象児」と周囲の幼児の実態を把握し、就学前に「言葉による伝え合い」を中心に他の「姿」と絡めながら育てていく必要があることを職員全員で共有し、環境構成や保育計画に生かすことができた。
- ② 1月～3月には、保育記録を活用して小学校教員との引継ぎを行ったり、小学校との交流授業指導案を共同で作成したりする。



【成果と今後の展望】

- (1) 成果
 - ① 保育記録に「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を記載したことで、カンファレンスの際に幼児の実態や育てたい姿をより明確に職員で共有できた。
 - ② ①で共有したことを各学年の保育に確実に生かすことができた。
- (2) 今後の展望
 - ① (1)①から、①年少児からの計画的な保育を再考できたので、小学校教員と共に教育課程の見直しを図っていく。

(5. 宮城教育大学附属幼稚園)

視点	2	ステップ	2	実施時期・回数	年間・10回
特別支援教育コーディネータと共に行う接続支援					
【取組の実際】					
<p>(1) 山形大学附属学校園には、特別支援学校在籍の全体コーディネータが配置されており、週に2日ずつ幼稚園と小学校に勤務し、子供たちに必要な支援を提案したり、幼・小・中をつなぐ支援計画を作成するにあたって助言を行ったりしている。幼稚園生活及び小学校生活両方の子供の様子を知っていることで、それぞれのつまずきの要因も把握しやすい。幼稚園においては小学校接続を見据えて、担任と共に発達に応じたソーシャルスキルトレーニングを行ったり、保護者との面談を行ったりしている。さらに、養護教諭や担任と保育記録をもとにしたカンファレンスを行って、具体的な支援方法を小学校に引き継いでいる。</p> <p>(2) 子供への支援</p> <p>① 小学校生活では集団での活動が多くなることを踏まえ、学級全体での活動として、特別支援教育コーディネータと共に次の2つのソーシャルスキルトレーニングを行った。</p> <p>ア) セカンドステップコース0（NPO法人日本こどものための委員会）を活用し、実際に自分の身体に触れながら、歌で「よく聞く、よく聞くルール」を身に付けるようにしている。気持ちが高ぶり走り回ったりする子供も、両手を胸に当てながら「からだはおちつく」と口ずさむことで、少しずつ落ち着くことができるようになった。「きもちがわかる」トレーニングでは、パネルやゲームを用いて、自分の気持ちを担任や友達に言葉で伝えることができるようになってきている。</p> <p>イ) 具体的な生活場面を取り上げた活動では、子供たちに身近なパペットを用いて「友達への関わり方」や「おかたづけのルール」等を一緒に考える活動を取り入れた。好ましい行動を自分で考えることで、少しずつ自分たちの生活に取り入れることができるようになっていく。</p> <p>② それぞれの困り感に応じた教材の開発</p> <p>友達への関わり方に課題のある子供には、好ましい行動を引き出すためのカード、活動に見通しがもちにくい子供には、安心して活動に取り組めるように活動の内容を順序立てて視覚化したカード等、それぞれの困り感に応じた教材を作成し、活用している。</p> <p>(3) 保育記録と支援方法の引継</p> <p>特別支援コーディネータが養護教諭や担任と共に、保育記録をもとにしてカンファレンスを行い、子供の状況や成長等について確認する。効果的な支援方法や教材については、小学校に引き継ぐとともに、入学後の様子についても幼稚園において把握し、他の子供への支援につなげている。</p> <p>(4) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について</p> <p>「言葉による伝え合い」を意識しながら、伝え合いに至るまでの過程への支援を大切にしている。活動の中で「自分の気持ちに気づき、言葉にする」ことや、「相手の話に耳を傾ける」ことに加え、降園前には遊びやお気に入りのものを紹介する活動を取り入れ、友達との伝え合いを楽しむことができるようにしている。</p>					
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果</p> <p>附属小学校の実際の様子を知っているコーディネータが支援等を検討し、幼稚園に取り入れることで、子供に合った方法を継続して実践し、円滑な接続につながっている。</p> <p>(2) 今後の展望</p> <p>スタートカリキュラムにも、必要なソーシャルスキルトレーニング等を取り入れるなど、小学校教員とともに、支援の接続について見直しを図っていく。</p>					



視点	1	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間・20回
週案研修会					
【取組の実際】					
(1)	<p>「週案研修会」を実施する意図</p> <p>今、園長のリーダーシップのもとに、教育課程の基本的な理念や目指す幼児像、幼稚園修了までに育てたいこと等を十分話し合い、共有することが求められている。そこで、本園では、週案の中に書かれている担任の思いや意図を園長（管理職）としっかりと共有することが大切であると考え昨年度より2週間に1度園長と学年担任との週案研修会を実施している。</p>			 <p style="text-align: center;">【週案研修会】</p>	
(2)	<p>「幼児期の終わりまでに育ててほしい具体的な子供の姿のプロセス」について</p> <p>昨年度、本園では、「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を遊びや生活の中の具体的な姿として捉え、その意味を理解していくことが、保育の充実や小学校との接続を円滑にしていく手立てになるのではないかと考え研究を行ってきた。左の写真は、その具体的な姿を本園の教育課程と関連付けて10の視点から写真と言葉で可視化し、幼児の発達していく方向性や連続性を意識しながら、それぞれにふさわしい姿を一覧に示したものである。</p>			 <p style="text-align: center;">【具体的な子供の姿のプロセス】</p>	
(3)	<p>「10の視点」をツールとして</p> <p>昨年度の反省から、教師は日々の実践に追われ教育課程全体が見えにくくなる（子供の育ちの見通しがもちづら）という課題が見られた。そこで昨年度作成した「幼児期の終わりまでに育ててほしい具体的な子供の姿のプロセス」を活用しながら、「週案研修会」時に子供の姿を、10の視点をツールとして振り返り語ることを繰り返し行った。管理職と担任が子供の育ちの捉えを共有することにつながり、見通しをもった環境の構成や援助について具体的に考えることができた。</p> <p>日頃から10の視点をツールに日々の保育を振り返る担任の姿が見られるようになった。</p>			 <p style="text-align: center;">【前週までの子供の姿】</p>	
【成果と今後の展望】					
(1)	<p>成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 10の姿をツールとして活用したことで、担任の思いや子供の育ちを共有しやすくなり、環境構成や援助の見通しについて具体的に話し合うことができるようになった。 ・ 子供たちの育ちを10の姿をツールとして見取ったことで、自分自身の保育の特性等にも気づくことができ、自分の指導の方法を振り返り、見直すきっかけとなっていた。 ・ 「幼児期の終わりまでに育ててほしい具体的な子供の姿のプロセスを活用」したことは、教師が、子供の具体的な育ちの姿を捉えることに役立っていた。 				
(2)	<p>今後の展望</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 10の姿をツールとして子供たちの育ちを語り合う研修を継続することで、さらに、職員一人一人が、本園の教育活動等について語るできるよう向上を図っていきたい。 				

視点	2	ステップ	2	実施時期・回数	年間・11回
園内研修での話し合い（事例検討会）					
【取組の実際】					
<p>(1) 静岡大学教育学部附属幼稚園では、今年度、互いの保育実践の記録を読み合い、多様な視点で幼児理解を深めることを目的とした園内研修のテーマを「主体的・対話的で深い学び」とし、幼稚園から小学校以降へとつながる学びのプロセスの検討に取り組んでいる。本園では、地域の教育委員会からの人事交流による職員（近年では、全員の前職が市内の小学校教諭である）が担任の過半数を占めていることから、話し合いの際には前職での経験を生かした幼児理解についても言及することが期待されている。その中で、幼稚園教育における「主体的・対話的で深い学び」とは何か、小学校教育における「主体的・対話的で深い学び」とはどう違い、どのように結びついていくのかを検討してきた。</p> <p>(2) 以下に年中担任の書いた7月の事例を示す</p> <p>① 高いところにあるセミの抜け殻を取ろうと試行錯誤する男児2名の姿と、それを見守る担任の思いが書かれた実践記録から、彼らの学びのプロセスと教師の援助の在り方について各自が自由に意見を述べた。</p> <p>② この事例の中では、セミを取りたいという意欲に支えられ、自分なりの考えに基づいて体を動かしつつも、隣で同じように取り組む友達の発言や教師の言葉を自分の考えに取り込んでいく姿を「主体的・対話的で深い学び」のプロセスとして評価できること、さらにここでは子供同士が対話しているというよりは、互いの発言を受けて自分なりの考えと対話させて新しい考えを生み出しているという意味で、対話的であると捉えるべきではないかということが指摘された。</p> <p>③ 小学校の授業では「どうやったら取れるか」という共通の目標に向かって、それぞれが考えを出し合うことが多いのに対し、この事例ではそれぞれが「自分が取りたい」という意欲をもって主体的に行動していく中で、それぞれの体験を生かしながら試行錯誤している。幼児教育においては学びの目標（学習課題）をその子に合わせて決められることや、目標の達成を評価するのではなく、目標に向かって取り組むプロセスを丁寧に評価することが重要であることが指摘された。</p>					
					
				【セミの抜け殻とり】	
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果 話し合いの中で出てきた用語（「主体的」「対話的」「目標」「評価」等）は、幼稚園でも小学校でも使うが、そのイメージするところは微妙に異なっている。そこにズレがあることを認識したうえで、教育課程の編成を行ったり、小学校教員との話し合いを深めたりすることが、幼小の連携や接続へとつながることが分かった。</p> <p>(2) 今後の展望 「主体的・対話的で深い学び」という視点で事例検討を行った結果、小学校教諭に分かりやすい表現で幼児教育における学びのプロセスを説明できると自信をもつことができた。毎年開催される附属小学校教員との連絡会議を、ただの進学予定者の引継ぎに終わらせることなく、互いの教育課程を理解し合う場として活用できるようにしていきたい。</p>					

視点	2	ステップ	2～3	実施時期・回数	通年
----	---	------	-----	---------	----

幼児の姿を見取る視点の工夫

【取組の実際】

(1) 本園が研究テーマとして取り上げている「夢中になって遊ぶ姿」、そして「幼児期の学び」は、幼児教育において育みたい資質・能力の育ちを考える上で非常に重要である。だからこそ、日々の遊びの中でそれらを丁寧に見取り、また教師の願いを込めて支えていきたいと考えている。そのためには、幼児の内面理解が欠かせない。そこで、「幼児が何と向き合う中で心を動かしているか」という視点から、三つの対象（「じぶん」「ひと」「もの」、図1）について考えることにした。これは、附属小学校における学び手とつながる三つの要素（「自己」「他者」「モノ」と似た考えであり、互いの共通理解が進むことを期待した。また、予想される幼児の姿、あるいは実際に幼児が見せた姿について、三つの方向性（「向き合い深める」「つながり広げる」「表現し高める」図1）に整理し、指導計画の立案に役立てようと試みている。

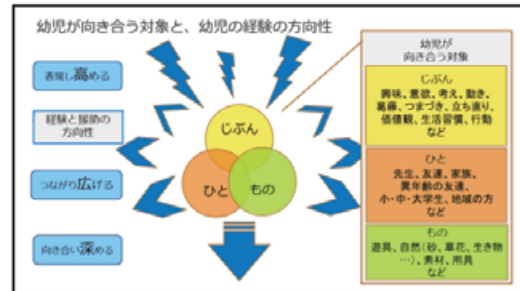


図1. 三つの対象と三つの方向性

(2) 先の三つの対象について、その活用例を以下に挙げる。

- ① 幼児の姿を見ながら感覚的に捉えたことを、記録や事例（図2）に整理する。
- ② 他の教師と協議をする中で、それぞれの整理の仕方を重ね合わせて幼児の姿をより深く理解し、同時に自身の見取り方を見直す。
- ③ ①、②を念頭に置きながら、翌日、翌週、翌月の指導計画（図3）作成に生かす。

(3) (1)、(2)と共に、三つの方向性を意識しながら幼児の姿を予想し、捉え、そして振り返る。

(4) 小学校教師との話し合いで、(2)や(3)を含めた指導案や事例を用いて協議を行った。

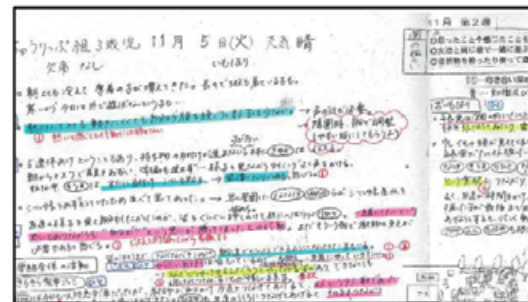


図2. 保育記録（11月 年少）

図3. 指導計画（7月 年長）


【成果と今後の展望】

(1) 成果

- ① 三つの対象を意識して、幼児の思いや考えを推測しながら保育を行うことで、これまでよりも一層、幼児理解が深まった。
- ② 保育の計画を立て、実践する中で、幼児の姿の変容や活動の展開について三つの方向性を意識することで、より幅広くより深い経験を保障することができつつあると感じている。

(2) 今後の展望

- ① 三つの視点、及び三つの方向性を取り入れた保育を行う中で、幼児がどのように育っているのかを丁寧に見つめなければならない。特に、幼児教育において育みたい資質・能力や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を視点として、幼児の育ちを捉えていく必要があるだろう。

視点	3	ステップ	2	実施時期・回数	年間・4回
「ポートフォリオ」(個人ドキュメンテーション)による情報共有					
【取組の実際】					
<p>(1) 本園では幼児の育ちの記録として個人ドキュメンテーションの作成を行っている。これを「ポートフォリオ」と呼び、年に3回、学期ごとに発行し、主に保護者へ子供の園での様子を伝える手段として活用してきた。写真や文章で構成した「ポートフォリオ」は、子供の育ちが時系列で分かるようになっており、個々の特徴や遊び、交友関係の変化などが視覚的に分かるため、小学校入学時の引き継ぎ資料として幼児指導要録と共に活用している。</p> <p>(2) 右図はその一例である。「ポートフォリオ」の特長について、以下に挙げる。</p> <p>① 子供たちの園での様子を分かりやすく伝えるため、学期毎に写真と文章で構成した個の遊びの記録をA4サイズの本用紙1枚にフルカラーで発行している。</p> <p>② 保護者に伝わりやすいように、写真にどんな遊びをしているところかを明記したり、その時の様子や子供の発言などを簡単に説明したりして、保護者が楽しく見ることができるよう工夫している。</p> <p>③ 遊びの様子は月毎に時系列で掲載し、子供の遊びがどのように繋がっていったか、また、どのように広がっていったかが捉えやすくしている。さらに、年間を通して見比べることによって子供の遊びの変化が分かるように写真の説明などの文章も工夫を行っている。</p> <p>(3) 実際には、幼小職員の情報交換の場である「幼小連絡会」の際に、引継ぎの資料として活用した。また、成育歴等で配慮が必要な子供や、日常生活の中で特別に支援が必要な子供などを引き継ぐ場合も、顔の表情や身体の特徴などを説明する時に大変役に立っている。</p>					
					
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果</p> <p>子供一人一人の顔や身体の特徴が一目で分かるので、小学校の担任にとっても覚えやすく、入学後の指導にすぐに活かしやすい。また、興味・関心があることや交友関係が分かりやすいので個別の支援計画も立てやすいと好評であった。</p> <p>(2) 今後の展望</p> <p>「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識した記述にすることによって、小学校入学後の教育課程との繋がりを明確にし、「スタートカリキュラム」作成の面からも役立つようにしていきたい。</p>					

視点	(2)	ステップ	2	実施時期・回数	(1) 年間35回 (2) 年間20回
----	-----	------	---	---------	------------------------

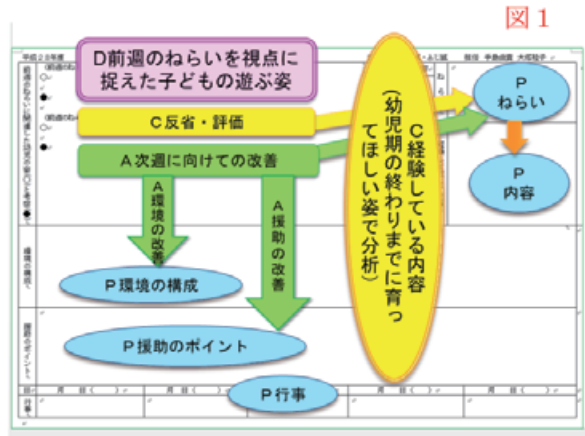
評価指標を活用した幼児の学びの捉え

【取組の実際】

(1) 週指導計画に評価指標を活用する。

以前は、学級の幼児の学びを捉える際に、幼稚園教育要領や本園の教育課程などから担任が生み出していた。しかし、平成29年度以降は評価指標を活用して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で分析するようにした(図1の楕円部分)。

その学びを基にして次週のねらいや内容を導き出し、指導内容や指導方法の工夫改善を行っている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を子供の学びを捉える視点として、修了時に向けて学びに必要な体験が重ねられるように、週指導計画を作成している。



(2) エピソード研究に評価指標を活用する。

一人一人の学びの姿を、評価指標を活用して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で分析してエピソード(図2)に書き、幼児理解や指導の評価と改善に役立てている。

具体的には、エピソードの考察の中で、担任として悩んでいる環境の構成や援助の方向について提案した後、全職員でそれぞれの教師が捉えた学びの姿やその後の援助の改善案について協議している。

今年度は、幼児期における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、保育者の援助に下線を引き、どのような学びを支えたいと考えて行った援助なのか分かるように、文末に㊦・㊧・㊨の記号を書き加え、更に別枠に今後の指導の工夫も記入するように改善した。

【成果と今後の展望】

(1) 成果

- ① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を網羅した評価指標を活用したことで、幼児の成長を連続的なものとして捉えることができた。次週に必要な環境の構成や援助などを具体的に考えることを繰り返して週指導計画を作成したことで、幼稚園修了時に向けての学びに必要な体験が重ねられるようになった。
- ② エピソードを通して幼児について話し合い、評価指標を活用して幼児の姿を捉えたことで、幼児を多面的に捉え、多様な指導の工夫改善の方向性を見出すことができた。また、主体的・対話的で深い学びの視点から、学びを支える援助を行えるようになった。

(2) 今後の展望

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」はもとより、幼児期における主体的・対話的で深い学びや幼稚園教育について、小学校等へ今後様々な機会を捉えて広めていきたい。

視点	3	ステップ	2	実施時期・回数	年3回
個人用ドキュメンテーション					
【取組の実際】					
<p>(1) 鹿児島大学教育学部附属幼稚園では、平成29年度から「遊びの中で育まれる子どもの学び」をテーマとし、研究を進めてきた。その中で、子供たちの学びをどのように見取り、見取った学びをどのようにして記録し共有していくかについても議論してきた。本園では以前より、長期休み前に、その時期の子供の様子を文章にまとめて保護者に渡していた。その形式を見直し、写真と併せてまとめるドキュメンテーションを作成することにした。写真を入れることで、保護者により伝わりやすく、また、遊びごとに文章をまとめるため、遊びの中の学びが詳しくまとめられると考えた。こうして、個人ごとにドキュメンテーションを作成し、年3回、長期休みの前に配付し、保護者に子供の育ちを伝えている。</p> <p>(2) 図1は、実際に保護者に渡したドキュメンテーションである。日々の遊びの中から3つを取り上げ、遊びの中での子供の気付きや工夫などをまとめている。また、最後には生活面を記す枠も設け、身支度や食事、友達関係のこと等幼稚園生活全般を通した子供の育ちや今後の課題・見通しについてまとめるようにしている。</p> <p>図2は、1つの遊びを取り上げたものである。舟をつくってプールで遊びたいという思いから、牛乳パックやペットボトルで舟をつくる姿を取り上げ、どうしたら、きちんと浮く舟をつくることができるか、材料やつくり方を考え、工夫しながらつくっていった姿に着目してまとめた。また、遊びの中で関わりのある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も併せて記載することにした。1つの遊びに1つの姿があてはまるわけではないため、あてはまる姿を複数載せることにした。保護者には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がまだ詳しく理解されていないので、ドキュメンテーションを配付する前の学級会で説明するようにした。</p> <p>(3) ドキュメンテーションを配付したことで、保護者からは、幼稚園での様子がよく分かるかと好評を得ている。また、3月の小学校との引き継ぎの際には、個人ごとにそれまでのドキュメンテーションをまとめ、資料として渡した。小学校では、学年会で内容を確認する時間を設け、子供の学びや具体的な姿を知ることができたとの感想が聞かれた。</p>					
<p>図1</p> 					
<p>図2</p> 					
【成果と今後の展望】					
<p>(1) 成果 子供の学びをまとめることで、一人一人の育ちを保護者と共有することができた。また、学年間や小学校との引き継ぎ資料とすることで、子供の学びを具体的に伝えることができた。</p> <p>(2) 今後の展望 より効果的に引き継ぎに活かすことができる内容にできるよう、形式を小学校と一緒に検討する。また、面談で保護者とドキュメンテーションを基に話をする機会を設けるなどして、子供の育ちを保育に生かしていきたい。</p>					